

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Muslims in a Non-Islamic Environment : With Focus on Arab Muslims in Canada

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片倉, もとこ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004342

異文化環境におけるムスリム

—カナダにおけるアラブムスリム社会の形成—

片 倉 も と こ*

Muslims in a Non-Islamic Environment
—With Focus on Arab Muslims in Canada—

Motoko KATAKURA

This paper examines the past and present situation of Muslim immigrants in Canada, with special emphasis on the Arab Muslims in British Columbia and Vancouver.

The first section deals with Canadian immigration history until the present. Canada's immigration policies, especially exclusionist immigration policies and the racially unbiased policy known as the "point system", are discussed.

The second section traces Muslim and Arab immigration to Canada and British Columbia, leading to the present. Ismaili and Iranian communities are examined, as are a few groups of Arab origin.

The third and fourth sections discuss the situation of the Muslim and Arab communities in Canada today. The development of the Muslim communities, and the problem of ethnic identities are discussed. This provide an initial insight into the ethnic and religious biases that existed in Canada in the past and continue to the present. Finally, the problems of adjustment facing Arab Muslims to non-Islamic environment are described, with an observation of Canadian-born generations, who will play a significant role for the survival of Muslim community in the Canada of tomorrow.

* 国立民族学博物館第2研究部

序 問題の所在	Ⅲ. 「ムスリム」・「中東」・「アラブ」に対する 否定的態度
Ⅰ. カナダにおける民族集団とその移住過程	1. 偏見と無知の存在
1. 自由入国期	2. カナダ政府公認教科書にあらわれたアラブまたはムスリム
2. 選抜的移民政策	3. 偏見の具体化例
3. 移民衰退期	Ⅳ. カナダにおけるアラブムスリム・コミュニティの形成
4. 新移民政策期	1. 環境対応への3つの類型
Ⅱ. カナダ及びブリティッシュ・コロンビアにおけるムスリムとアラブ移民の流入	2. イスラーム的環境の整備
1. カナダへのムスリム移民	3. 新世代の問題
2. ブリティッシュ・コロンビアにおけるムスリム	総括と結語
3. アラブ移民の流入	

序 問題の所在

「異文化環境」とは、何をさすか。これについて、厳密に検討しはじめると、それだけで1つの論文になってしまうだろう。ここでは、「異文化環境」の意味するところをごく単純に、「非アラブ的、非イスラーム的環境」、あるいは、「西欧的、キリスト教的環境」というぐらいの意味で使いたいと思う。「ムスリム」は、「イスラーム教徒」とおきかえることも可能であるが、ここでは、意図的にムスリムという言葉を用いることとした。イスラーム教徒という言葉を使った場合、イスラームを信奉している者という宗教的意味合いが、表面に出てくるきらいがある。しかし、ここでは、ムスリムとして生れても、イスラームからほとんど遊離している者や、イスラームを否定している者も含めて考察したいと思うからである。つまり、宗教的人間よりも全人間の人間を考えてみたいと思うからである。

本論文における「アラブ」とは、アラビア語を母語として持つ人達、およびその子孫たちをさすこととする。従って、もはやアラビア語を話すことのできなくなった2世、3世もアラブとよぶこととする。また、「アラブムスリム」というとき、アラビア語を母語として持つ人達、およびその子孫で、しかも生れおちたときに、自動的にムスリムとよばれるようになった人たちのことをさす。「アラブ」の中には、キリスト教徒やユダヤ教徒、バハイ教徒などさまざまな者が交り、「ムスリム」の中には、インドネシア、インド、パキスタン、フィジーなどさまざまな国籍を持つ人達や、さまざまな民族が含まれる。本論文では、広い意味で、「アラブ」や、「ムスリム」をさすときには、「アラブやムスリム」「ムスリムおよびアラブ」という表現を用いる。

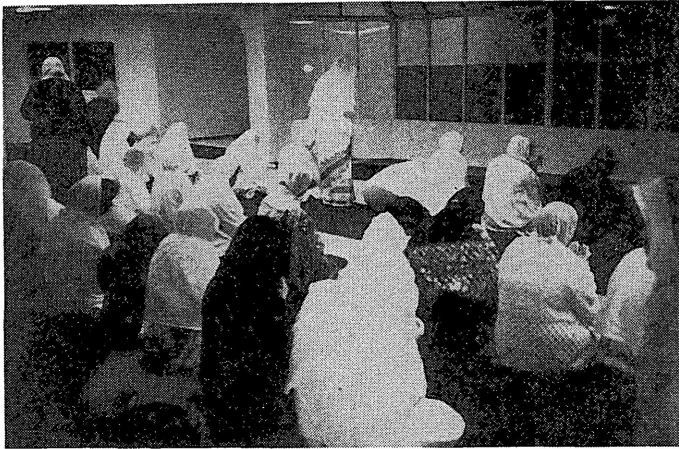


写真1 「集団ムスリム」モスクで礼拝する女性ムスリムたち

筆者は、エジプト、サウジアラビア、シリア、イランなどのいわゆる中東地域におけるムスリムについての調査研究を、数年来続けてきたが、いつの頃からか、中東地域以外の、すなわちムスリムがマジョリティ・グループではないところに存在するムスリムを勉強してみたいと考えるにいたった。

その理由、およびそこに所在する問題は、次の3点に要約される。まず、集団ムスリムと個人ムスリムの問題を考えてみたいと思うのが、第1点である。ムスリムは、イスラーム的環境の中でのみ、イスラーム的でありうるのだと言われることが、しばしばあった。まわりのみなが祈りをするから祈る行為をする、みなが断食をするから断食をするというように、ムスリムは集団



写真2 「個人ムスリム」自宅の一室で一人、礼拝する女性ムスリム

指向が強いのだと指摘されることがままあった。日本の研究者の中には、日本的な「世間体」というものが、ここにも存在すると指摘し、たとえばイランでは、それを

ゲイド=ワ=バンデ=エジティマーイーとよぶと記述されている¹⁾。しかし、これらの指摘に対して、筆者は全面的に肯定することが出来ないと考えてきた。とくにアラブの場合には、もっと複雑な様相が観察された。たしかに集団指向や同調性は、アラブにも存在するものである【片倉 1981; KATAKURA 1981】。イランの場合にはアラブに比べて、より大きい程度に存在することは、認められる。しかし、同時に、個人指向というべきものも観察される。主体的に、「我と神」の関係を保っている者も多数存在することが筆者のフィールド・ワークの中で確認された。もし世間体といった集団指向の中でのみ、イスラーム的であるとするなら、キリスト教徒が多数であるような社会に出ていったムスリムは、日に5回という面倒な祈りはやめ、断食の行からも解放され、異教徒たちと酒をくみかわすようになるのだろうか。イスラーム教徒が、非イスラーム的環境におかれたときにどうなるのか、どのような行動様式をとるのかを見てみると、この問題は、より明確に浮きぼりにされるのではないかと考えた。

第2点は、イスラームがヨーロッパやアメリカで第2の宗教になりつつあるということである。イスラームは、アラビア半島に生まれた宗教であるが、それが東南アジアに伝わって、現在、イスラーム教徒の絶対数からいうと、東南アジアの宗教と言ってもよいぐらいになっている。ヨーロッパでも、まだ数は少ないが、質的に問題にし得るムスリムが存在している。ウィーンやパリにも、立派なモスク（モスク）が建てられ、多数のムスリムたちが集っている。筆者が1983年にロンドンを訪れた際にもまるでイスラーム革命後のイランと同じような光景が繰り広げられているのを観察し

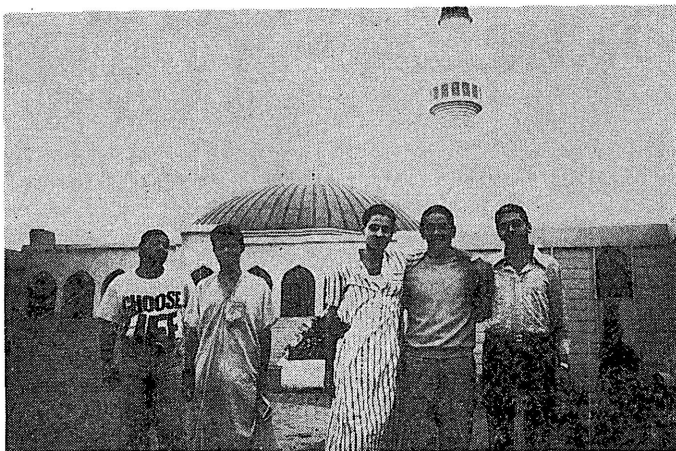


写真3 ウィーン21区のマスコドとムスリムたち

1) 字義通りには、「社会的な圧力と緊縛」を意味する。日本的にいうと、いわゆる「世間体」といった意味合いになる【大野 1971: 382】。

た。ロンドンでは長期にわたる調査ができなかったが、このときの研究を1つの手がかりとして、カナダでの調査研究を行なうことにした。

第3には、異文化環境におけるムスリムの問題を、人間の移動にともなう文化の問題として考えてみたいと思うのである。人類の歴史はさまざまな形での人間の移動(migration)の歴史であると言ってもいい。人間が、政治的・社会的・文化的な境界(boundary)を越えて移動するときに、移動する個人・集団が保持していた従来の文化が、他の文化圏の中でどのように変化するのか、あるいはしないのかということをも、具体的に考えたいのである。近年は、世界の政治・経済の相互依存にともない、国の内外への大規模な人口移動がおり、このような状況の中で、Safaも指摘するように、地域におけるエスニック・マイノリティが、適応の1つの様式としての同化(assimilation)を拒み、文化的アイデンティティの保持を求めるといった現象が、世界的に起っている [SAFA and DU TOIT 1975: XII]。

カナダでは、トルドーが政策として打出した多元文化主義(multi-culturalism)がとられているが、それとあいまって、民族原理(ethnicity)がどのように出てくるか、あるいは出てこないのかの問題を考えてみようと思う。

これらの3点をふまえた上で、本論文ではカナダのムスリム、とくにアラブムスリムの過去と現在の状況について、検討する。まずカナダ全体の移民構成の中にムスリムをとらえ、現在にいたるまでのカナダの移民の歴史を検討し、さらに、カナダにおけるアラブやムスリムたちが直面した問題について、文献・資料と、新聞記事の分析および面接調査、聴きこみなどをもとに考察する。本論文は、バンクーバー市のエジプト人社会についての集中調査研究報告へのまえがきとなるものである。

I. カナダにおける民族集団とその移住過程

カナダは、比較的新しい国家で、「自治領カナダ」として結成されたのは、1867年である。以来、一世紀余りの間に、カナダの人口は急速に増加したが、その人口増加の主要な原因は、積極的な移民政策にあった。世界の各地域から大量の移民を受け入れ、現在のような、さまざまな民族集団を構成員とする多文化主義の国家に発展するに至ったのである。しかし、移民政策というものは、一般に地球上のどこにおいても、受け入れ国の損得勘定のからみ合いの上で施行される傾向がある。カナダも、例外ではなかった。世界中の難民を受け入れているという印象を一般には与えながら、実はカナダ移民の窓口も、公平に開かれていたわけではない。カナダへの自由な移住は、

のちに述べるように、ごく限られた初期の時代のみで終焉し、以後人種的・民族的背景を理由に、移民志望者を選択し、ある部分を排斥することがしばしばおこなわれた。1967年に、移民政策の基本的な変更があって以来、カナダ移民法は、そうした人種的偏見にもとづく選択条項を削除したが、今なお実質上の排斥選択は行なわれている。また、長期にわたって続いてきた偏向移民政策は、カナダの今日における民族構成に、多大な影響を与えている。

カナダにおける移民政策の歴史を、以下の4期に分けて考察してみることにする。

Elliott も、ほぼ同様な分類をしている [ELLIOTT 1979: 162]。

- 1) 1895年以前——「自由入国」(Free Entry) 期
- 2) 1896年以降、第一次世界大戦まで——選択的移民政策期
- 3) 第一次世界大戦終結から第二次世界大戦まで——移民衰退期
- 4) 第二次世界大戦終了後以降、現在に至るまで——「点数」制度 (merit points) による新移民政策期

1. 自由入国期

カナダで初めて人口調査が行なわれ、記録されたのは1608年であり、28人の所帯主らしき居住者が記録されている [ELLIOTT 1979: 164]。この中には、明らかにカナダの原住民などは含まれていず、その他の住民ももれていると考えられる。いずれにせよ当時の非原住民の居住が、いかに小規模であったかを示している。カナダ発展の初めの1、2世紀には、移民の大多数が、フランス人とイギリス人であったが、ドイツ人、オランダ人、黒人もそれらに続き、かなりの数にのぼった。

初期に、カナダの政治的・経済的支配力をもっていたのは、フランス人であったが、いわゆる「フランス時代」は、1867年の自治領カナダの成立をもって終了する。その当時、イギリス系移民の人口は、カナダ全体の60.5%、フランス系移民は、31.3%であった²⁾。従って、数の上でもイギリス人は、カナダの移民集団の中で、もっとも有力となり、その影響力は、20世紀に至るまで継続した。近年、イギリスからの移民は減少しつつあるが、長期にわたりイギリス連合王国は、カナダへ最多数の移民を送り出す国であった [ANDERSON 1981: 162]。

自治領カナダの結成に際し、政治的支配力を握ったイギリス人は、早速に自らとフランス人を「特権グループ」(Charter Groups) と称した。カナダにおける最初の永

2) この人口比のデータは、カナダ人口調査における出身地に関する質問をもとに出されている [RIEDGER (ed.) 1978: 85]。

住移民者としての立場を公けのものにするためであったと考えられる。引きつづき、1896年には、初めての移民法が設けられ、その法令の管理者として、Clifford Sifton が内務大臣に任命された。1896年に Sifton は、新しく選抜的移民政策を布告し、これにより、カナダの移民の歴史における「自由入国」(Free Entry)の時期は終了した。

2. 選抜的移民政策

内務大臣として、Sifton は、新しく建設されたこの国家には、今後いかなる移民志望者をも、無条件に受け入れてはならない、カナダの要求と「最大の関心」にもっとも適合した移民のみを選択していくべきである、という方針を強く打ち出した。当時、カナダは、西部カナダを特に農業の面から開発し、それにより、東部と西部を統合する必要に迫られていた。従って、第一次世界大戦までの、この選抜的移民政策期において Sifton は、農業経験のある移民のみを主として求めた³⁾。その多くは、南部及び東部ヨーロッパからであり、この時期、それらの国からの移民人口は、相当な数に

表1 カナダの人口増加、および移民人口 (1871-81~1961-71)

10年	人口		移民	
	総人口	年平均人口増加率概算	移民数	10年平均の人口に対する%
	(単位千)	(%)	(単位千)	
1871-1881	3,605	1.60	353	8.8
1881-1891	4,325	1.12	903	19.7
1891-1901	4,833	1.06	326	6.4
1901-1911	5,371	2.98	1,759	28.0
1911-1921	7,207	2.00	1,612	20.2
1921-1931	8,788	1.68	1,203	12.6
1931-1941	10,377	1.04	150	1.4
1941-1951	11,507	1.72	548	4.4
1951-1961	14,009	2.68	1,543	9.6
1961-1971	18,238	1.70	1,429	7.2
1971-	21,569	—	—	—

Dominion Bureau of Statistics, Censuses of Canada, 1851 to 1961: Statistics Canada, 1971 Census of Canada, Ottawa Information Canada. Kalbach, W. E., The Canadian Immigration and Population Study, Department of Manpower and Immigration, Ottawa, Information Canada, 1974, Table 1.1, 2.6 をもとに、片倉作成。

3) 特定移民の移住促進のために旅費の補助、定住奨励、植民地化協会への優遇措置などが行なわれた [ANDERSON 1981: 167]。

4) 1896年から1914年までの18年間にカナダへの移民は300万人を越えた。とくに1913年には、その年だけで40万人の移民があり、カナダ移民の歴史において最も移民の多かった年として記録されている [ANDERSON 1981: 167; ELLIOTT 1979: 165]。

表2 カナダの人口変化の構成要因 (1871-1971)

10年a	出生	自然増加	移民数	移民実数
	(単位千)	(単位千)	(単位千)	(単位千)
1871-1881	1,477	723	353	-87
1881-1891	1,538	714	903	-206
1891-1901	1,546	718 (670)c	326 (250)c	-180 (-130)c
1901-1911	1,931	1,120 (1,030)	1,759 (1,550)	716 (810)
1911-1921	2,338	1,230b (1,270)	1,612 (1,400)	351 (310)
1921-1931	2,415	1,360	1,203	229
1931-1941	2,294	1,222	150	-92
1941-1951	3,186	1,972	548	169
1951-1961	4,468	3,148	1,543	1,081
1961-1971	4,063	2,703	1,429	627

出典 Department of Manpower and Immigration, 1972 *Immigration Statistics* Ottawa, Information Canada, 1974, Table 1

- a 国勢調査と国勢調査の間のデータ
- b 第一次世界大戦の戦死者を含む
- c P. Camu, E. P. Weeks, and Z. Sametz, "Economic Geography of Canada", Toronto, Macmillan of Canada, 1964, Table 3 において修正された見積り

のぼった⁴⁾。

選別的移民政策は、しかしながら、「望ましい」特質をもった個人を求めることにあったばかりでなく、カナダ人となりうる一部の移民志望者を「望ましくない」(unadmissible)、あるいは「同化不可能」(unassimilable)とみなして、移民の道から排斥することにも使われた。この政策にもとづき排斥されたのは、カナダ当局が大まかに名指しているように、「アジア人」が大多数であった⁵⁾。民族的排斥の政策は、このようにして始まり、20世紀後半まで延々と続くことになった。これについては、後に詳しく述べることにする。

5) この「アジア人」の中には、中東からの人々も含まれた。カナダ政府が「資格なし」とみなす地域からの人々は、おしなべて「アジア人」の範疇に入れられた。ブリティッシュ・コロンビア州ではアジア人に対する人種的反感の高まりから、アジア人移民排斥政策がエスカレートした。従来、ブリティッシュ・コロンビア州はアジアからの移民の入国拠点で、19世紀末には、CP 鉄道敷設に伴い、多くの中国人移民を受け入れた。この結果、初期移民であるヨーロッパ系の移住者は、ブリティッシュ・コロンビア州、特にバンクーバーで次第に大きくなるアジア人コミュニティに対して脅威を抱き始めた。彼らはアジア人排斥連盟を結成したり、排斥的移民政策に荷担する運動を行ったり、1907年の反アジア人暴動に見られるように、暴力にさえ訴えてこの迫り来る脅威と戦った。連邦政府は、このヨーロッパ系移民とアジア系移民の衝突の解決策として、以下の様な事項を含む移民法を施行した。1884年には、カナダに入国するすべての中国人に対して「人頭税」50ドルが課せられていたが、1903年には500ドルに引き上げられた。1923年には、カナダへの中国人移民は削減された。また、移民局は、他の地を経てカナダへ渡ってきた移民を排斥した。その他、移民法の中には、中国人を除くアジア人移民に対して、入国料として200ドルを課すことをとり決めたものもある [Novris 1971: 214-225]。

表3 出身別カナダ移民 (1926-45, 1946-55, 1956-65)

出 身	1926-45	1946-55	1956-65
イギリス人	47.8%	34.1	32.9
北西ヨーロッパ人	24.4	30.2	20.7
中央・東ヨーロッパ人	19.1	15.1	7.7
南東・南ヨーロッパ人	4.5	15.3	30.0
ユダヤ人	3.4	3.6	2.2
アジア人, その他	0.8	1.7	6.5
合計 %	100.0	100.0	100.0
人 数	950,944	1,222,318	1,476,444

Department of Manpower and Immigration, Annual Immigration Reports; Royal Commission on Bilingualism and Biculturalism, Book IV, Ottawa, The Queen's Printer, 1970, Table A-1. Kalbach, W. E., The Immigration and Population Study, Department of Manpower and Immigration, Ottawa, Information Canada, 1974, Table 2.1. により片倉作成。

3. 移民衰退期

排斥的移民の時期は、第一次世界大戦の勃発により、突然終止符を打つことになった。この時より、第二次世界大戦の終了までの約30年間は、移民流入に衰退をもたらした時期である。カナダは、この時期、2つの大戦を戦い、1930年代の経済不況を切り抜けることに没頭していたのである。

第二次世界大戦の終了と共に、移民への新たな関心が生れた。当時の首相、Mackenzie King は、カナダの大幅な人口増加、経済発展の手段として、移民受入を奨励した。しかし、それにもかかわらず、人種・民族にもとづく排斥的政策は引き続いた。イギリス、アメリカ合衆国につづき、フランスがカナダへの移民を送り出す「好ましい国」に加えられ、他の国々は、「好ましくない国」として分類された。

人種偏見にもとづかないとされる移民政策が、カナダに導入されたのは、1967年になってからにすぎない。この新しい政策は、「点数」制度によるもので、移民応募者は、年齢、教育程度などの個人的特性にもとづいて「点数」を与えられ、その合計点により審査される⁶⁾。この新しい政策が導入された結果、カナダ移民の構成は変化した。「第三世界」からのホワイト・カラー層が新しい移民の大部分を占めるようになった

6) 移民応募者に適用された「点数」制度は100点満点であり、学歴、経験、人柄、希望職種、職業技能などを始めとする9種目別の得点を合計して求められる。このシステムにおいては学歴、経験、職業技能に30点の配点がある。これは、カナダ政府が経済的な必要性を優先していることを示すものである。事実、年を追うごとに移民選抜はカナダの経済面に左右される割合が増した。1974年の移民法の改正案には、「移民応募者の職業は、カナダで必要とされているものに限る」という提示がなされている [GREEN 1976: 34]。

のである⁷⁾。

すでに述べたとおり、連邦政府による排斥的移民政策は、明らかにカナダの民族構成に多大の影響を与えた。註5に記したとおり、「アジア人」コミュニティにそれが強く表れている。中国人、日本人、インド人に加え、黒人、中東その他の国からの人も排斥の対象であった。これらの民族・国籍を背景にもつ個人は、カナダへの移民を禁止、あるいは停止された。

この排斥的政策により、多くのムスリムおよび、アラブにとっても、カナダ入国は困難となり、時には全く不可能となった。「望ましくない分子」をカナダから締め出し、おくための方策として、一例をあげると、P.C. 926 会議の法令 (Order in Council P.C. 926, 1908) と呼ばれるものがある。この法令はアジア系の移民に、カナダ到着の際に入国料として200ドルを払うことを義務づけたものである。これにより事実上、貧困な移民はカナダ入国を阻止されることになった。第二次世界大戦後に移民政策が緩和されるまで、P.C. 926 が現実にはシリアからの移民の数を減少させたことが指摘されている [ABU-LABAN 1980: 85]。事実、1911年から1951年までの間、アラブ系カナダ人コミュニティの人口増加率はたいへん低く、人口増加は、主として、自然増加によるものであった。この排斥の方策は、第二次世界大戦後まで、他の民族集団同様、アラブ・ムスリムに対しても続けられた。

4. 新移民政策期

第二次世界大戦後、特に、1962年及び1967年に、基本的な移民法の改正が行なわれた。既述のとおり、この新しい移民法には、「点数制度」が取り入れられた。その内容は、註6に記したとおりである。個々の移民応募者を選抜する際に、カナダの経済的要求が、ますます重要な決定要因となったわけである。1985年12月より、カナダ移民の応募資格を得るためには、普通、個々の応募者は、カナダ人の雇用者によって、職が提供されているという公的証明を示さなくてはならない。その場合、カナダ市民には、あまり適さない職種の方がよい。比較的裕福で、自営業の個人が応募できるものに、企業家の部類があった。このグループは、個々の特殊な事情にもとづいて、審査された。

個々の応募者の場合、経済的要因が、ますます大きな条件になったのは事実であるが、一方で、保証人のある移民に対しては、カナダ移民法は、かなり一定した態度を

7) *Immigrations Statistics 1956-1974* [DEPT. OF MANPOWER AND IMMIGRATION 1976] の移民統計に基づいて、戦後カナダへ移民を送り出した国々をぬき出し、その職歴を検討した。

表4 カナダへの移民数(1983-1985)

年	予定された移民数	実際の移民数
1983	約 115,000	89,157
1984	約 120,000	88,239
1985	約 125,000	約 69,000

1985年12月9日, Employment & Immigration Canada Office
で行なった聴き取り調査により片倉作成。

保っている。カナダ政府が、親族の再統合を最優先とみなしているためである。親族の部類で移民応募できるのは、以下のような場合である：・保証人の配偶者、及び、その21歳未満で未婚の扶養家族・60歳以上の、保証人の両親、あるいは祖父母（もし保証人がカナダ国籍をもつ場合には、年齢制限は不要）、及びそれに同伴する扶養家族・未婚または孤児であり、18歳未満の保証人のきょうだい、姪、甥・保証人の婚約者とその扶養家族。

しかしながら、引き続き経済不振のために、全体として、カナダへ受け入れられる移民の数が、減少していることは明白である。トロントの移民専門の弁護士である Mendel Green は、次のように述べている。「多額の資金をもち、職を提供できるような企業家であるか、あるいは、近い親族がカナダに住んでいる場合以外には、カナダに移民してくるものはいない。」⁸⁾ 表4で示したように、過去3年間の予定された移民の数と、実際にカナダに入国した移民の数を見ると、この減少は明らかである。1983年から1985年の間に、受け入れられる予定の移民の数は、増加するはずであったが、実際には減少している⁹⁾。Department of Employment of Immigration, Canada Office が非公式に発表したところによれば、カナダの移民は全体として、40パーセント減少した¹⁰⁾。

Ⅱ. カナダ及びブリティッシュ・コロンビアにおける ムスリムとアラブ移民の流入

1. カナダへのムスリム移民

ここで、現在に至るまでのムスリムとアラブの、カナダ及びブリティッシュ・コロ

8) 1984年11月21日付, The Globe and Mail 紙の Mary Gooderham の記事による。政府当局は、移民の受け入れ枠を表4のように示してはいるが、「事実上のしめ出しを行なっている」という意味合いをこめて語られたものである。

9) 移民経過と統計に関する、最も新しい情報は、1985年12月9日に Department of Employment and Immigration, Canada Office のバンクーバー出張所の2人の職員からの聴き取り調査による。

10) Department of Employment & Immigration, Canada Office における聴き取り(1985年12月9日および、1986年1月12日)による。

ンビアへの移民の歴史について検討する。まず初めに、カナダ全体のムスリム移民に注目する。

カナダへのムスリム移民は、さきに述べたような1900年代の移民法の変化により、そのつど多大な影響を受けてきた。この事実、今世紀になってからのカナダのムスリム移民の人口増加の様子をみれば明らかである。1901年、カナダの全ムスリムの人口は、300人から400人であり、1900年代の前半にかけて、わずかに増加し、1911年には1500人、1951年には約2000人から3000人のムスリムが登録されている。しかし、続いて起る移民法の緩和に伴い、ムスリム・コミュニティに急激な人口増加がみられ、1980年のムスリム人口は、10万人と推定されている¹¹⁾。

カナダへ移民した初めてのムスリムは、スコットランド出身であることが記録されているが¹²⁾、それにつづく大多数のムスリム移民は中東、インドなどの伝統的なイスラーム国家の出身である。1901年に登録されている300人から400人のムスリムは、主としてトルコ、及びシリア出身であり、1911年には、1500人のうち約100人はトルコからやって来た者たちであった [ABU-LABAN 1983: 76]。

すでに述べた理由により、1911年から第二次世界大戦後までの約40年間、ムスリム・コミュニティの発展も極小であり、大戦直後のムスリム移民の大多数は、中東、及び東ヨーロッパからであった。

1960年代の移民法の改正により、ムスリム移民の国籍、民族は変化する。1961年以降は、インド亜大陸からの移民が急増し、1966年以降には、イギリス、東アフリカ、南アフリカ、トリニダード・トバゴ、フィジー、モーリシャス、ガイアナからのインド系ムスリムの移民が増加し、カナダのムスリム・コミュニティに重要な変化をもたらすこととなった [ANDERSON, *et al.* 1983: 226]。

ムスリム・コミュニティを構成する民族・国籍の異なるそれぞれのグループについて各々のグループに関する報告をしたいと考えたが、入手できる資料がわずかであるため、それには限界があることが判明した。ここでは、比較的情報量の多いイスマリーイー¹³⁾・コミュニティとイラン人コミュニティを概観する。アラブ諸国出身のムスリム・コミュニティについては、のちに検討する。

11) カナダ人口調査の結果とムスリム指導者らの推定をもとに、およそのムスリムの概括人口を算出すると、こういう数字になる。

12) カナダ・ムスリム・コミュニティ協議会 (CMCC) の全国異宗派間調停者 (National Interfaith Co-ordinator) である Aziz Khaki による。1985年10月29日に行なった片倉とのインタビューで明らかにされた。

13) シーア派の一分派で、7イマーム派とも呼ばれる。その名は、シーア派のイマームの系図において、イスマリーールを第7代イマームと主張することに由来している。主にシリア、アフガニスタン、トルキスタン地方、インド、東アフリカに信徒が多い。

カナダにおけるイスマールイーリー・コミュニティは比較的新しく、1970年頃からのものである。その当時、北米全体に約600人のイスマールイーリーが居住し、そのうち100人ほどが西部カナダに住んでいた。大部分のイスマールイーリーは、アフリカからの移民である。元来は、インド亜大陸、グジャラートなどの出身者であるが、1世紀近くの間、アフリカに居住していた者が大部分である。アフリカ大陸において、彼らは経済的優越を持つにいたったが、それが現地先住民たちの間で問題となり、1970年代の初めにかけて、アフリカ、特にウガンダでのイスマールイーリー虐待が激しくなった。1972年にはウガンダで「アジア人追放」が起り、カナダに居住しているイスマールイーリーは、この時、ウガンダから移住したものがその端をなしている。

これらの先行グループにつづき、多数のイスマールイーリーがカナダに移住し、1985年には、イスマールイーリー人口は、20,000人にのぼると推定されている [ANDERSON, *et al.* 1983: 235]¹⁴⁾。イスマールイーリーは、カナダでの新しい環境にうまく適応し、彼らが従事する職業も多種多様にわたっている。女性のイスマールイーリーも他のムスリム女性に比すると、格段に多数の者がカナダの労働人口の中に組入れられている。彼らの適応度の高い理由は、a. イスマールイーリー・コミュニティの持つ集団としての組織力が強力であること [ANDERSON, *et al.* 1983: 235], b. 西欧の産業主義の生活に適合した生活様式、すなわち「イスラームの西欧化」ともよべるようなやり方を採用していること¹⁵⁾、c. コミュニティ成員の団結への希求の強さが存在することの3つに要約される。

他方、カナダのイラン人コミュニティは、カナダ・イスマールイーリーよりもはるかに小規模であるにもかかわらず、たがいにばらばらで統一されていない。コミュニティとしての団結を欠いている理由には、以下のようなことがあげられる。

a. イラン本国におけるイスラーム革命、及びその後の状況を反映し、対立する政治的派閥による緊張関係が存在する。b. カナダに移住したイラン人は一般にイスラームに対する熱心さが低い。c. イラン系カナダ人の人口は比較的に少ない上、カナダ全国に散在し、それぞれに孤立する傾向がある。

バンクーバーのイラン人については、Aziz Khaki や Faruk Al-Essedy が、次のように指摘している。イラン人ムスリムは、内部の政治的対立のために、コミュニティ形成の契機を持たなかった。一方、政治紛争にまきこまれるのをおそれて、バンク

14) 1985年3月2日付 Vancouver Sun 紙の記事では、およそ35,000人と書かれている。

15) イスラームの六信五行の1つである断食も、イスマールイーリー派の人々は、現代生活への適応を考え、行なわなくてよいとする。また、キリスト教徒が食前の祈りをするように、食前には、食卓についた人のうち誰かがリーダーになって、祈りをする。子供たちも、小さい時から、この役割ができるようにしつけられる。

ーパーの他のイスラム組織が、意図的に疎外している傾向がみられる¹⁶⁾。

イラン人イスラムは、イスマエーリー・イスラムと同様、大部分は1970年初期以降に、カナダに移民してきた者である。1946年から1965年の間には、カナダ全土に283人のイラン人移民があったにすぎない。その大部分は学生として入国し、のちに移民となったケースであった [DEPT. OF SECRETARY OF STATE 1979: 122]。1966年から1975年の間には、1730人のイラン人が主にテヘランから移民した。その他のイラン移民は、ヨーロッパ諸国からのイラン人移民であった [DEPT. OF SECRETARY OF STATE 1979: 122]。1979年の革命以来、カナダは、イランから政治的亡命者を多数受け入れた。しかし亡命者たちを無条件に受け入れたわけではない。先に述べたカナダの移民法の枠組の中である。したがって、資産をもち、高学歴であるものが大部分であり、たとえばバンクーバーにおいては、高級住宅地である West Vancouver に、ほとんどが居住している。カナダに存在するイスラム・グループの中で、イスマエーリー・イスラムとイラン人イスラムは全イスラム人口のかなりの部分を占めるといわれているが、正確な人口統計はない。

宗教人口を把握するのは、地球上どこでも一般に困難なことの1つであるが、カナダのイスラムの人口を正確に把握するのも、その例外ではない。1985年には、12万から14万人の間であろうといわれている¹⁷⁾。そのうち、オンタリオ州に最も多数のイスラムが住んでいる。1980年代初めに、オンタリオ州に約50,000人¹⁸⁾、アルバータ州に約15,000人、そして、その他の地域に約2万人が居住すると推定されている [ABU-LABAN 1983: 77]。これらのイスラム人口のほとんどは、大都市に集中する傾向がみられる。しかし、都市の一部に密集したイスラム居住地域を形成している例は、モントリオールの一部を除いては、ほとんど見うけられない。バンクーバーの例のように、都市中心部及び近郊地域に分散して、かなり個別的に居住しているのがふつうである。

2. ブリティッシュ・コロンビアにおけるイスラム

ブリティッシュ・コロンビアのイスラム人口の推定値も、資料によってまちまちで

16) 1985年10月29日に行なった Aziz Khaki および、1985年11月24日に話し合った BCMA の役員、Faruk Al-Essedy による。

17) この数値は、前記、Aziz Khaki により提示された。しかし、北米イスラム協会の地域事務所長である Mohammad Ashraf は、1983年6月25日付 Toronto Globe and Mail 紙の掲載の記事で、カナダには20万人以上のイスラムがいると述べている。また一方、Murray Hogben は、1980年頃のカナダのイスラム人口は、7万人に近いと推定している [MURRAY 1983: 112]。Aziz Khaki は、著名な学者であったという前歴と、現在の職業（前述）の性格上、彼の数字は、最も信頼のおけるものであると判断した。

18) そのうち約4万人はトロントに居住 [ABU-LABAN 1983: 77]。

あるが、カナダ全体のムスリム人口の統計に比べ、比較的一致の度合いが高い。即ち、スンニ・ムスリムが約7000人、イスマーイーリーを除くシーア・ムスリムが1200から1400人、イスマーイーリー・ムスリムが6000から7000人である。ブリティッシュ・コロンビアでのこれまでのムスリム人口の変化を見ると、上記の数値は、明らかに最近になって増加した結果であることがわかる。1964年にはわずか300人、1968年までに徐々に増加して700人、その後急速に増加し、1972年には、2000人となる。1984年現在の人口は上記のように推定されている¹⁹⁾。

ムスリムが初めてブリティッシュ・コロンビアに移住したのは、1910年代であるが、大多数は、カナダの他の地域と同様、1960年代後半の移民法の緩和以降に移住したものである。カナダ全体の傾向と同じく、ブリティッシュ・コロンビアでもムスリム人口は都市に集中している。即ち、グレーター・バンクーバーに大多数のムスリムが居住している。

ブリティッシュ・コロンビアのスンニ・ムスリム7000人のうち、もっとも多数を占めるのは、フィジーからやって来たムスリムで4000人から4500人、つづいて、パキスタン、トルコ、そしてインドの順になる。1966年のブリティッシュ・コロンビアのスンニ・ムスリムの最多数は、現在同様、フィジーからのムスリムであったが、エジプト、パキスタン、アラブ、レバノン、トルコ、そしてインド人がそれにつづいた。フィ



写真4 ブリティッシュ・コロンビア、リッチモンドのマスジドに集まるムスリムたち

19) ブリティッシュ・コロンビア州のムスリム人口の推定値は、Census of Canada [FEDERAL 1961, 1971, 1981], Aziz Khaki との1985年12月3日のインタビュー、並びに Charles P. Anderson [ANDERSON, *et al.* 1983: 228] および、バンクーバー・ムスリムセンターの所長である Muhammad Zairul Khan の談話（1966年5月21日付の Vancouver Sun 紙掲載記事）を参照した。

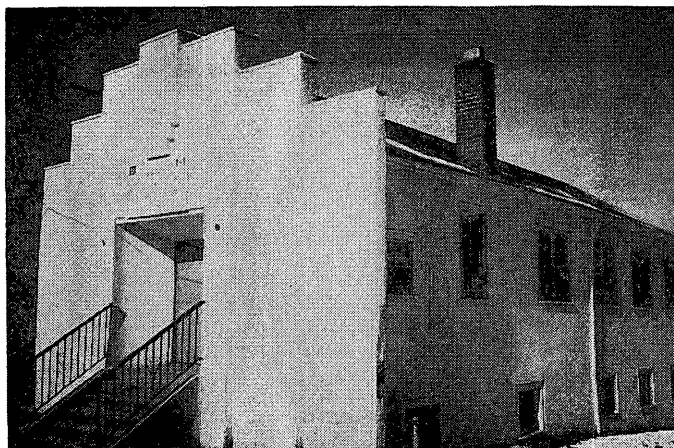


写真5 バンクーバーの中心街にあるイスラムセンター

ジー・ムスリムは、「カナダ・フィジー・ムスリム協会」を独自に作っているが、同時に、ブリティッシュ・コロンビアのスニ・ムスリム会員の組織である、British Columbia Muslim Association (BCMA, 註41参照) の成員でもある。ブリティッシュ・コロンビアのインド・アフリカ系イスマエーラーは、バーナビーにあるイスマエーラー・センターにより組織されており²⁰⁾、イラン、パキスタン、レバノン、イラク、



写真6 ブリティッシュ・コロンビア在住ムスリムのうち最多数を占めるフィジー・ムスリムたち

20) ごく少数のシリア系イスマエーラー・ムスリムが、ブリティッシュ・コロンビアにも居住しているが、バーナビーのセンター（ジャマアトカネ）には行かない。センター側では、彼らを拒む理由は何もないと言うが、実際には、インド・アフリカ系のイスマエーラー・コミュニティが独占する形となっている。

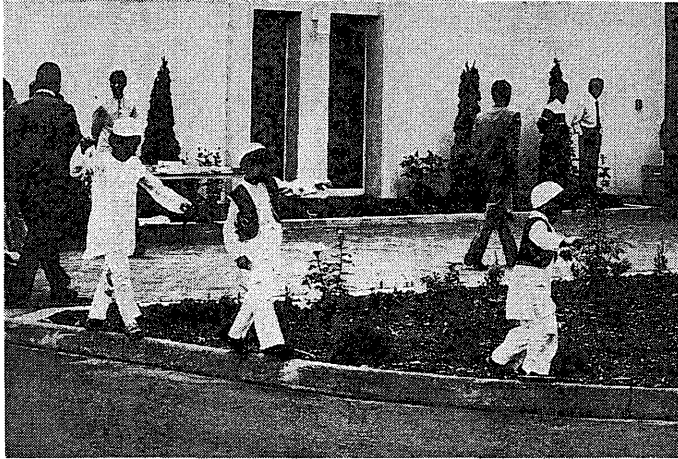


写真7 イード・アルフィトルの初日、 Masjidの前ではしゃぐ子どもたち

東アフリカからの他の少数のシーア・ムスリムたちは、リッチモンドにある小さなシーア派Masjidに集結することが多い²¹⁾。

フィジーのインド系ムスリム、パキスタン人ムスリムは、ブリティッシュ・コロンビアのムスリムのマジョリティ・グループであり、さまざまな方面での活躍が目立つ。BCMAの会長はフィジー人であり、Masjidのイマーム²²⁾も、代々フィジー人かパキスタン人によって占められている²³⁾。エジプト人ムスリムによれば、リッチモンドのMasjidも、フィジー人イマームに「乗とられた」という。サレーのMasjidのイマームはインド人²⁴⁾、バンクーバーのMasjidのイマームはパキスタン人である。

21) このモスクおよび、バンクーバーの中心街にあるパキスタン・イスラミックセンター（スニ・マスジド）は、小さいながらムスリムたちの避難所になっており、留学中に親から送金の途切れたヨルダン人、失業中のインド人などが、その地下に居住している。

22) 人々が「イマーム」と呼ぶ者には、一般に次のような2種類がみられる。a. アズハルなどの宗教大学を出、ラービタのような宗教機関から派遣されたMasjid専属のイマームで、たとえばBCMAから給料を支給される者。b. 大学などの出身ではなく、世俗的な職業に従事しているがコーランをよく暗誦し、イスラームについての知識も豊富な者。

aの方が、はるかに権威があるというわけではない。イスラームでは、本来宗教者の間に制度的なものはなく、権威は、イスラームに関するどの程度の知識をもっているかによって決められる。

23) 註22で述べたaのカテゴリーに入るパキスタン出身のイマームが、BCMAから900ドル（1985年11月当時、約17万円。当時のカナダでは、これだけで生活していくのは、家族をかかえている場合にはかなりきつい）を支給されて、1985年2月まで専属でいたが、移民法に触れる問題が起これり、本国へ帰された。そのあとは、bのカテゴリーに入るイマームが、他薦自薦で、祈りの時間ごとに交替で、祈禱のリーダーを務めている。

24) BCMAから700ドルの支給を受け、リッチモンドのMasjid敷地内の一角に、小さな家を提供され、家族（子ども2人）と共に住んでいる。

3. アラブ移民の流入

カナダおよびブリティッシュ・コロンビアにおけるムスリム移民の中には、既にふれたように、もちろん、アラブムスリムも含まれていたが、これらアラブムスリムを含めて、広い範囲でのアラブ移民についてここで考察してみたい。カナダのアラブについて調査したものはすでに少数ながら存在するけれども、それらは、イスラーム教徒のアラブ、すなわち「アラブムスリム」とキリスト教徒のアラブすなわち「クリスチャンアラブ」とを区別していない。カナダにおけるムスリム移民の一部として、アラブを検討することが本稿の目的であるが、もちろん、アラブは必ずしもムスリムではない。むしろカナダの場合には、キリスト教徒のアラブが、数の上では常にアラブムスリムを上まわってきた。今世紀初めには、アラブ移民の90パーセント以上はキリスト教徒であったし、この割合は、多少変化したとはいえ、いぜんキリスト教徒のアラブは多数を占めている。現在でも、カナダの全アラブ人口の75パーセントはキリスト教徒であると推定されている [FEDERAL STATISTIC CANADA PUBLICATION 1981]。しかし、アラブムスリムのもつ重要性については、注目しておかねばならない。

さきに述べたムスリム移民の歴史と同様に、今世紀の前半は、アジア人に対する排

表5 カナダへのアラブ移民 (1946-1975)

入国年	人 数	入国年	人 数
1946-1955*	1,491	1966	3,114
1956**	571	1967	3,608
1957**	563	1968	5,437
1958**	353	1969	3,256
1959**	404	1970	2,641
1960**	337	1971	1,967
1961**	301	1972	2,123
1962	1,912	1973	3,595
1963	2,281	1974	4,533
1964	3,379	1975	3,839
1965	2,914		
		合計(1946-1975) 48,619	

出典 Department of Manpower & Immigration, "Immigration Statistics, 1956-1975" をもとに片倉作成。

* 1946-1955年の数字は、Immigration Statistics, 1970, Table 13 からとった。

** 1956-1961年の数字は本人の申し出た出身民族にもとづく。1955年以前、及び1962年以降の数字は渡加以前に長くいた国にもとづく。

表6 カナダのアラブ人口(性別, 州別)

	カナダ	ニューファ ンドランド	P.E.I.	ノヴァ・ スコシア	N.B.	ケベック	オンタリ オ	マニトバ	サスカ チュワン	アル バータ	B.C.
1941											
合計	11,857	—	182	1,469	573	4,002	3,810	445	681	428	262
男性	6,288	—	98	786	303	2,135	1,985	242	352	251	131
女性	5,569	—	84	683	270	1,867	1,825	203	329	177	131
1951											
合計	12,301	277	208	1,397	392	3,622	4,578	455	466	504	393
男性	6,469	138	120	746	214	1,916	2,358	250	237	281	204
女性	5,832	139	88	651	178	1,706	2,220	205	229	223	189
1961											
合計	19,374	417	240	2,153	984	5,302	7,137	590	678	1,327	530
男性	10,112	213	129	1,157	505	2,817	3,632	304	354	720	270
女性	9,262	204	111	996	479	2,485	3,505	286	324	607	260
1971											
合計	28,550	35	105	675	180	7,535	16,835	350	240	1,965	620
男性	16,135	20	50	375	100	4,215	9,510	210	130	1,115	400
女性	12,415	15	55	300	80	3,320	7,325	140	110	850	220

出典 “Census of Canada 1941”, Vol. IV, Table 1 (全准州には計5名の男性)
 “Census of Canada 1951”, Vol. I, Table 32 (全准州には計5名の男性, 4名の女性)
 “Census of Canada 1961”, Vol. I, Part: 2, Table 35 (全准州には計11名の男性, 5名の女性)
 “Census of Canada 1971”, Bulletin 1.3-4, Table 18 (全准州には男女合わせて10名)
 1971年の数字は、「出身国」ではなく「母国語」による。以上の資料をもとに, 片倉作成。

斥的政策のために、アラブ移民の数は限られていた。その人口が急速に増加するのは、第二次世界大戦後、特に、1960年からの10年間、移民法の緩和のあった時期である。しかしながら、現在は、カナダの経済不振その他の理由のために、移民の流入は少なく、他国からの移民と同様、アラブ移民の数も限られている。

カナダのアラブ移民の歴史は、3つの時期に分けられる。a. 第二次世界大戦前、b. 1946年以降1961年まで、c. 1962年以降、現在の経済不振が移民の流入を止めるまでの時期。第二次世界大戦前に移民したアラブは、主として、今世紀初めにアジア系移民排斥のために考案された移民法が適用される以前にカナダへ入国した人たちである。これらの移民の中でも、最初のグループは、主にシリアと今日レバノンとして知られる地から来たキリスト教徒アラブである。レバノンからの移民は、祖国でのトルコ人支配から逃れ、また、経済的好機を求めてカナダへやってきた者たちである。これらの初期の移民は、大部分がケベック州とオンタリオ州に、一部がノヴァ・スコシア州に定住した [ABU-LABAN 1980: 74-76]。彼らは、カナダで与えられた様々な経済上の好機をうまく活用し、経済的にはたいへんよく適応した。彼らの持つ旺盛な企業家的精神の結果であるといわれている。アラブ移民の多くは自営業の商売を営むために、行商の形をとり、親族のつながりを広範囲に利用して地歩をかためた [HAGOPIAN and PADEN 1969: 31]。

1946年から1961年の間には、比較的わずかのアラブ移民があったにすぎない。それらの多くはレバノン、パレスチナ、シリアからであった。初期の移民同様、彼らは学歴が低く、ブルー・カラー職、あるいは農業関係の職へと進んだ。しかし、戦後になってからは、カナダで急速に進んだ工業化、都市化の形態に適応していくことに、特に学歴を持たない移民は困難をおぼえ苦勞したという。

1961年以降のアラブ移民は、それ以前のアラブ移民に比べ、有利な条件をそなえていた者が多かった。専門職、あるいは準専門職に就く者の数は多く、専門職指向も高かった。1956年から1974年の間に移民したアラブのうち、58パーセントに至る者が専門職あるいはホワイト・カラー職に就こうという意志をもっていた [ABU-LABAN 1979: 33, 1980: 116-119]。1974年以降のデータはないが、この率が下降したということは考えられず、むしろ、上昇したと推測される。1961年以降のこれらの新しい移民は、国籍もまた、初期のアラブ移民とは異なってきた。大部分はエジプト人であり、さらにそのエジプト人のうち多数がキリスト教徒(コプト)であった。1946年以降1975年までに移民したアラブの大多数はエジプト人で、18,115人、それにつきレバノン人16,333人、モロッコ人7,234人、シリア人3,713人、ヨルダン人737人、チュ

ニア人583人であった [DEPT. OF MANPOWER AND IMMIGRATION 1976]。しかし、その後1976年から1983年までは、レバノンからの移民が最も多くなり、この時期だけで18,740人に及んだ。つづいてエジプトから4,949人、モロッコから2,534人であった²⁵⁾。

以上に示すとおり、アラブ移民の大多数は一貫してレバノン、エジプト、シリア、モロッコからである。従って、これら4カ国からの移民の特徴について、さらに検討することに意味があると思われる。ただし、モロッコからの移民の中には、ムスリム・モロッコの移民も多少はいるが、その大部分はユダヤ系であり、カナダではモロッコ人は、ユダヤ人コミュニティに属するとされている。故に、本論文の主題からは置かれるので、ここではレバノン、エジプト、シリア移民のコミュニティについて検討してみたい。

レバノン人がカナダに初めて移民するようになったのは、1800年代の後半である。彼らは貧困で、なによりもまず職に就くことが先決であった。大半は文盲に近かったが、独立して商売を始めるための技術と強い意志をもち合わせ、急速に、主として商業、行商への道を開いていった。こうした自営業に就こうとする傾向は、現在でもレバノン、シリア・コミュニティの間で顕著にみられる特徴である。彼らは、まずモンクトリオール、オタワ、トロント、つづいてカナダ全国に広がって、商売を営むようになった。

1955年以前、カナダでは統計の上でレバノン人はシリア人、トルコ人と同じグループに分類され、1956年以降は、トルコ人とは別にされたがシリア人と同じグループに分類された。そのため、レバノン人移民のみに関しては、今世紀前半の統計は不明確である。1956年から1983年の間に35,358人のレバノン人がカナダに入国し、少なくとも1956年から1975年の間に、これらの移民の45パーセントがオンタリオ州に、35パーセントがケベック州に定住するようになった²⁶⁾。

カナダ西部地域に、後述するように注目をひくムスリム・レバノン人の移民コミュニティが存在する。アルバータ州エドモントン市、及びラク・ラ・ビッシュ市に定住したレバノン人たちのコミュニティである。このアルバータ州のグループと、その他、ケベック、オンタリオ州以外に住むレバノン人は少数であるが、カナダ全国に散在するいくつかのレバノン人協会を通して、大多数のケベック、オンタリオ州のレバノン

25) Department of Employment & Immigration による。カナダを永住地とする移民を対象とする移民統計によったが、カナダを永住地にするかどうかは、ごく便宜上の質問にすぎなかったともいわれる。

26) 1956-1975年の数字は、Multiculturalism Directorate [DEPT. OF SECRETARY OF STATE 1979: 151-153] 参照。1976-1983年の数字は、Dept. of Manpower and Immigration の移民統計をもとにした。

表7 カナダへのエジプト移民 (1900-1983)

入 国 年	エジプト移民数
1900-1910	50
1911-1930	34
1955-1960	126
1961-1965	6,038
1966-1970	7,834
1971-1975	4,061
1976-1983	4,949

[DEPT. OF SECRETARY OF STATE 1979]

がケベック州、またはオンタリオ州を新しい居住地に選んでいる。エジプト移民の多数は、専門職あるいはホワイト・カラー職に就き、そのほとんどが、都市地域に集中する傾向をもっている。

初期のシリア移民については、統計の上でレバノン人と同類に扱われていたため、1955年以前にカナダに入国したシリア人のみの人数を正確に掴むのは不可能である²⁷⁾。シリア系カナダ人は、イスラーム教徒とキリスト教徒の2つのグループにほぼ二分され、その連帯や生活のあり方も全く別個である。シリア系ムスリムはエジプト系ムスリムにより親近感を持つことが、のちに報告する筆者の事例研究より明らかになった。1955年以降1975年までに、2,732人のシリア人移民があった。この時期には、52.3パーセントのシリア人がケベック州に、38.2パーセントがオンタリオ州に定住した。彼らの大半は、経済上のよりよい条件を求めて、また、シリアでの様々な政治的社会的混乱から逃れ、カナダへ移民した者たちである [DEPT. OF SECRETARY OF STATE 1979: 218]。レバノン人と同様に、シリア人もまた、一般に自営業という形で、商業、行商に従事するのが、典型的であった。

ブリティッシュ・コロンビアへのアラブ移民は、やはりエジプト、レバノン、シリア出身の者が多く、大部分がグレーター・バンクーバーに集中している。このうち最大の人口を占めるエジプト人については、稿を改めて詳細に報告する。

アラブ移民のうちには、イスラーム教徒の他に、エジプトのコプト²⁸⁾、バハーイ

27) 1955年に、公式に別々の国家として認められる以前のシリア人とレバノン人は、普通合わせて「シリア人」とよばれている。

28) キリストは神人の結合した一なるものであると主張する単性論の一派。コプトという名は、ギリシア語のアイグプティオス（エジプト人）に由来し、イスラーム以前のエジプトで支配的であった。ビザンツ時代、イスラーム時代を通じて迫害され、現在でもムスリムに対して差別された地位におかれている。典礼用のコプト語、284年を起点とする教会暦など、独自の文化を持っている。

人と結びついている。

エジプト人がカナダに移民し始めたのは、今世紀の初めである。その移民の形態は、すでに述べたアラブ移民全体とほぼ同様であるが、表7がその詳細を示す。

エジプト移民の大多数は、ケベック州に定住した。たとえば、1956年から1975年を例にとると、93.4パーセント

教徒²⁹⁾、レバノン・シリアのキリスト教徒がいる。それぞれの集団の人口統計は皆無で、ブリティッシュ・コロンビアの人口に占める割合も不明であるが、数の上ではコプト人口が最も多いと推定される。しかし、コプトたちはブリティッシュ・コロンビア州においても、カナダ全体においてもばらばらに散在しており、明確なコミュニティを形成していない。カナダ社会への同化が最もすすんでおり、中にはカトリックに改宗するものもいる。

バハイ教徒は、エジプトから追放されたという歴史があるため、バハイであるという事実を隠している者が多い。筆者が個人的に接触したところによると、エジプト人ムスリムはもちろんのこと、他のアラブともまったく接触を持っていない。その代わりに、イラン人バハイ教徒と密接な連絡をとって、月例会、宗教集会、あるいは親睦パーティーなどを共にしている。

レバノン系、シリア系のキリスト教徒も多いが、彼らはそれぞれ個別にカナダ社会に同化しており、コプトと同様コミュニティを作っていない。レバノン人ムスリムはコミュニティを作っているが、彼らは同じレバノン人のキリスト教徒よりもエジプト人ムスリムとの結びつきが強い。この他、アラビア語を話すレバノン系アルメニア人も、バンクーバーには推定12,000人が存在する。彼らもばらばらに生活しており、コミュニティを作らず、カナダ人社会に同化している。

Ⅲ. 「ムスリム」・「中東」・「アラブ」に対する否定的態度

カナダに移住してきたムスリム、およびアラブに関するおもに定量的側面については、情報量が十分とはいえないが、カナダの移民政策と関連づけながら前章までで一応のところ概観することができた。本章では、それらのムスリム、アラブを迎えたカナダ社会の側にどのような問題があったか、ムスリム、アラブに対する民族的、宗教的な偏見が、具体的にどのような形で表れたかを検討してみる。

1. 偏見と無知の存在

ムスリムおよびアラブに対するもっとも古く、はっきりした否定的態度の例は、さきにみたように、彼らのカナダ移住そのものを妨げ、ときに禁止した移民法である。

29) 19世紀半ば、イランで生まれたパーブ教徒運動の1分派。パーブの没後、パーブの教義を発展させ、平和主義と人類愛の理念を説いたバハーウッラー（1817～1892）の名にちなんで、バハイと呼ばれる。エジプトでは、ナセル時代以降迫害され、1960年代に国外へ出た者が多い。カナダのエジプト系バハイも、大部分がその例である。

ムスリム、およびアラブに対しては、西欧社会の中に十字軍以来の宗教上、民族上の偏見が存在し、アラブ移民について、「不誠実、不衛生であり、教育程度が低い」という見方が一般に固定していたが、これは、アラブ移民をカナダから締め出そうとする政府当局に、都合の良い口実を与えた。

差別的な移民法が緩和されたのちにも、カナダのマス・メディア、学校の教科書、そして一般市民の中に、アラブやムスリム移民に対する否定的なステレオタイプはかなりの程度存続し続けている。一般市民の間にばかりでなく、こういった偏見や無知は、大学教授などのインテリ層の間にさえみられる。たとえば近年、カナダはアルバータ州において石油が発掘され、アルバータ州の白人カナダ人は急に金持になった。この人たちをさして、「青い目のアラブ (blue-eyed Arabs)」と表現することが、インテリ層の間においてさえ、やっかみ 半分にしばしばなされるのである³⁰⁾。この表現は、少なくとも2つのことに対する無知を暴露している。1つは、すべてのアラブは石油成金であり、アラブは金持であるとの思いこみである³¹⁾。他の1つは、アラブには青い目のものはいない、と確信していることである。アラブには肌の白いものも、青い目のものもいるということを知らないのである。筆者は、カナダにおけるアラブムスリムの調査期間中、はじめからおわりまで、「なぜアラブやイスラームのような存在に興味を持つのか」と、カナダ人インテリの間でさえいぶかれ、アラブ研究者、あるいはイスラーム研究者であることを、かくした方がよいと思わせられる場面にはしばしば遭遇した。アラブやムスリムの人口が多く、中東研究の進んでいるイギリスでの調査の折も、多少の偏見が、いわゆる白人の間に存在するのが認められたが、カナダ「白人社会」およびそれに同化しようとしている日系カナダ人をはじめ同じ傾向を持つ他の民族集団の中に存在するムスリム、あるいはアラブおよびそれらの研究者に対するそれとない不快な眼は、イギリスにおけるより、はるかに大きいものがあった。

2. カナダ政府公認教科書にあらわれたアラブまたはムスリム

マス・メディア、その他公的な機関の与える中東についてのイメージ、あるいはムスリムおよびアラブについての像も、偏見あるいは知識の不足にもとづくものが多い。こうした事実認識の上に立って、すすめられた研究のひとつに、“The Middle East in Canadian Social Science Textbooks” [KENNY 1975] がある³²⁾。この

30) 筆者と Ken Burridge 教授 (ブリテッシュ・コロンビア大学宗教学人類学) その他との対話(1985年11月24日)の中で、カナダ人インテリのアラブについての無知が指摘された。

31) 石油により金持ちになったアラブは、全アラブ人口からいうと、5%にもならない極く少数の者のみである。

32) この研究の第一部は、オンタリオ州で公認されたカナダの社会科教科書の分析であり、第二部はそれらの教科書を使って教育にたずさわる社会科の教師についての調査である。

研究は、カナダの中等教育のカリキュラムの中で、イスラームがどのようにとり扱われているかを確かめ、また、公認教科書に書かれている中東の歴史の内容についての妥当性を評価しようとするものであった。アラブ、またはイスラムについて、カナダ人の公式見解がどのようなものであるかを、明らかにしたものといえよう。

この研究により、一般に、教科書から得られるイスラムやアラブ、あるいは中東についての知識は非常にわずかであること、また、中東あるいはアラブ、あるいはイスラムに対する教師の側の理解が不十分であることが明らかにされた。情報が少ないという事実の上に、その与えられたわずかな情報そのものも、多くの場合、不正確であり、かたよっていることも指摘された。たとえばイスラームは、「アラビアの、まったく無学な遊牧民の間」から生れたものとして説明されている³³⁾。中東のナショナリズムについては、「熱狂的」、「自己破壊的」、ナショナリストについては「外国人について狂信的反感をもつものたち」とのみ記述されている [KENNY 1975: 143]。

カナダに存在するさまざまな民族集団に対して、一般のカナダ人がどのようなイメージを持っているかについては、筆者も小規模な調査をしてみたが、その結果はこれらの教科書的アラブ像あるいはイスラーム像がよく定着しているといわざるを得ないものであった。アラブについてもっとも数多くあげられた性質は、「野蛮、未開、遊牧、時代遅れ、無秩序、イスラエルに対して戦闘的」であった。イスラムの特徴としてあげられたのは、「宗教熱心」であるが、それは好意的な意味合いを持つものではなく、「狂信的行為」と考えられている。

カナダにおける政府公認教科書が、あやまった認識を与えつつオンタリオ州で引き続いて用いられていることに対して、カナダ・イスラム・コミュニティ協議会(CMCC)では、1976年5月の第3回総会で、オンタリオ州の教育省 (Ministry of Education) への抗議を決議した。また、トロントの Canadian Society of Muslims は、「イスラムは学校教科書における、予言者ムハンマドに対する侮辱と、イスラームに対する歪曲を、決して許さない」として、抗議の署名を集めた。1976年6月14日付の Toronto Star によれば、700人以上のイスラムがトロント教育大学 (University of Toronto's School of Education) で集会をひらき、Canadian Society of Muslims の議長である Quadeer Baig が演説を行なった。また署名は、3,000人以上のものが集まったと報告されているが、その後、その結果がどうなったかについては不明である。

33) イスラームは、都市の宗教であり、町の人間の中から出てきたことは、現在では定説になっている。コーランの中には、「遊牧民は、なかなかイスラーム化しないやっかいな連中だ」と記述されている。

3. 偏見の具体化例

ムスリム、アラブに関する否定的イメージは、カナダ社会が彼らのコミュニティに対してとるさまざまな態度の中に顕著に表れているが、その点をさらに検討するために、この種の偏見がひきおこした事件のうち数例をとりあげておこう。

そのうちの一例は、ムスリムの中では最も西歐的であり、カナダ社会に同化の程度の高いとされるイスマーイーリー・コミュニティが経験したものである。彼らが、ブリティッシュ・コロンビア州バーナビーにイスマーイーリー・センター (The Ismaili Jamatkhana and Center) の建設を試みた時の事例である。それは、一般カナダ社会と、イスマーイーリー派イスラーム教徒たちとの、7年間の長期にわたる、紆余曲折にとんだ困難な交渉の過程であり、当時の新聞記事を調べると、イスマーイーリー・ムスリムたちは、カナダ社会の持つムスリムに対する偏見の犠牲であったことが明らかである。1975年3月18日付の **Vancouver Province** 紙に、「住民、偏狭的行為を告発する」という見出しで、交渉の様子が報告されている。それによれば、約225人の南バーナビーの住民が、地域集会を開き、イスマーイーリー・コミュニティがセンター建設のために買い取ろうとした約7エーカーの土地の売買に対して、「執行猶予」を求める投票を行なった。住民側は、決して人種偏見から反対しているのではないこと、ただ単に、これほどの広さの土地に建設されるような施設は近隣には望ましくないという理由だけのために抗議しているのだ、と訴えている [VANCOUVER PROVINCE NEWSPAPER March 18, 1975: 1]。5年後の1980年に、論争はさらに激しいものとなり、引き続き行なわれた交渉の様子は、1980年12月18日付の **Province** 紙の記事に報告されている。その記事の執筆者、Steve Berry によれば、300人のバーナビー住民が集まり、再びイスラーム教徒のセンター建設を許可するか否かについて話し合ったが、それは、野次と足踏みのとびかうすさまじい集会であったという。Berry は次のように解説している。住民の多くは、センター建設によって交通の混乱が起りうることを苦情として述べたが、しかし同時に、ノース・セントラル・バーナビー小売商組合の会長、Laurie Feenie が、「イスマーイーリー・コミュニティは、排他的、小党派主義で、バーナビーの住民とはうまくなじんでいかないうであろう」と訴えた時、聴衆から拍手喝采がおきた [VANCOUVER PROVINCE NEWSPAPER December 18, 1980: 8]。

紆余曲折を経て最終的には、イスマーイーリー・コミュニティはセンター建設を認められたが³⁴⁾、カナダの Aga Khan Shia Imami Ismailia Council の会長である



写真 8 7年にわたる紛争の末に建設されたイスマーイーリー・センター

Farouk Verjee は次のように述べている。「イスラームは西洋で理解されていない。これまで、我々の存在はあまり強力なものではなかった。（このたび建設するセンターが）ムスリムのコミュニティと歴史を知ってもらい良いきっかけとなるであろう [TORONTO GLOBE AND MAIL NEWSPAPER December 27, 1984: 10].」 Verjee のこの言葉は、明らかに自分自身の体験から、また、自分の属するコミュニティの体験からにじみ出たものと考えられる。

2 番目にあげる例は、オンタリオ州バリーの、シーア派ムスリムのグループが、学校の体育館を週 2 回、宗教上の集会に使用することを願い出たときのことである。1985年7月12日付の *Globe & Mail* 紙の記事によれば、この地域の教育委員会は、他のいくつかのキリスト教系の宗教団体には体育館使用を許可していたにもかかわらず、シーア派ムスリムグループの要請は、はじめのうち退けられた。

当時の新聞記事によれば、教育委員会の役員は、その頃レバノンで起きたシーア派民兵によるハイジャックを例にあげ、この事件に関しては、この地域のシーア派コミュニティも多少の非難を受けて当然であるとの見解を述べた。役員の一ひとは、すべてのシーア派イスラーム教徒は西洋世界に対する「聖なる戦い」を挑んでいる、と述べたという。教育委員会は、再度体育館使用について考慮することを要求され、2 度目の投票で、シーア派ムスリムたちの要請はようやくにして受け入れられた [TORONTO GLOBE AND MAIL NEWSPAPER July 12, 1985]。

34) イスマーイーリーには、経済的優位をもつ者が多く、また Aga Khan 財団の規模も大きい。バンクーバー所在の銀行など金融機関との結びつきから、その筋の有力者が住民に働きかけて、何とかセンター建設にもっていったとも言われている。

シーア派ムスリムのみならず、スンナ派ムスリムたちも、多かれ少なかれ同じような苦い体験を持っている。たとえば、ブリティッシュ・コロンビア州リッチモンドの大モスクも、その敷地のまわりに鉄条網がはりめぐらされている。家のまわりの庭に、日本のように生垣などを作る習慣さえないカナダでは、かなり異常なことである。モスク建設の途中で、妨害事故があったことから用心して作られたものだという。

サレーのモスクは、もとキリスト教徒の教会であったが、その建物が売りに出され、スンナ派イスラーム教徒グループが買いとり、手なおしをしてモスクにしたものである。ここにはインド系のムスリムの出入りが多いが、民族衣裳をまとった人たちが集まりはじめてから、時折投石があるようになったという。現在もお細いガラス窓の下に、「投石をしないように」という貼り紙が出されている。

これらの事件は、カナダ社会一般が持つムスリム、あるいはアラブに対する偏見や無知が、いついかなる形で顕在化するかわからないという例にすぎず、これに類したことは、日常のおこっているといわれている。カナダのアラブムスリムが、こうした否定的態度、批判的ステレオタイプが存在する中で、自分たちの民族・宗教的文化を保持していくためには、よほど強い民族的・宗教的アイデンティティをもつことが必要とされよう。次章では、その状況について検討してみたい。

Ⅳ. カナダにおけるアラブムスリム・コミュニティの形成

1. 環境対応への3つの類型

これまで述べて来たようなカナダの環境の中で、アラブムスリムたちはどのように彼らのコミュニティを形成してきたか。彼らの考え方、行動の仕方、生き方については、別稿で詳細な調査報告をするが、このコミュニティ形成にたずさわったアラブムスリムは、どのような人々であったかを述べるために、筆者の調査で明らかになったカナダにおけるアラブムスリムについて、ここで総括的に記しておきたい。調査研究の結果、次のような3つの型に分けて考察できることが明らかになった。

- a. 同化型（西欧主義型）
- b. 文化主張型（アラブ主義型）
- c. トランスナショナル型（イスラーム普遍主義型）

a型は、カナダ社会への強い同化要求を持ち、自らのアラブ的要素や、ムスリムとして生れついたことを、抹殺しようとする者たちである。「おくにはどちらですか」というような質問をされることを、非常に嫌悪し、答えをはぐらかしたり、「カナダ

人ですよ」とそっけなく答えるのが通例である。自分が誕生した時、親から命名されたムスリム名の、たとえば「ムハンマド」を「マイク」に改名したり、「アッタ」は「オッター」という具合に「英語化」して名のる者もいる。いわゆる「白人」とカナダでよばれている人たちとのつき合いを好む。そういう人たちと共に、酒を飲んだり、イスラームでは禁止されている食物を口にするをもつて、自分がカナダ化したとして満足するようなアラブである。この類型であると考えられる者は、筆者が集中調査したバンクーバーにおいては、別稿で詳述するように、数の上で、意外なほど少なかった。しかも、このグループに属する者は、アイデンティティ・クライシスにおちいることが多く、ある日突如として、b型を通りこして、c型に属し、熱心なイスラーム原理主義者になるという現象も観察された。

a型に属するようなアラブムスリムが、カナダ全体で、どのくらいの率で存在するかについては、誰も報告していないが、Harold Barclayは、アルバータ州のラク・ラ・ビッシュのアラブムスリム・コミュニティの調査をし³⁵⁾、カナダ社会によく同化している者は、おおむねイスラームに関して「不信心者」であると述べ、さらに最も厳格なムスリムは、ほとんどカナダ社会に同化していないし、その逆もまたなりたつと指摘している。彼は、コミュニティによって規定されたムスリムの義務³⁶⁾が、どの程度まで守られているかを調べた結果、「少数のきわめて敬虔なムスリムが中核にあり、その周囲をやや不熱心なふつうの信者がとりまき、その外に不信心者がいる」と図式化できると述べている。

Barclayによれば、「不信心者」の中には、実業界で成功している者が多いが、彼らは、同化の度合を増すことと経済的繁栄は正比例する、と考えているという。彼らは、「我々はすべて同じ神の子であり、同じ神の崇拜者である。」と、クリスチャンとムスリムの共通項を強調し、「我々はすべてクリスチャンである。」と言う者さえいると述べている [BARCLAY, 1969: 68-70]。

信心と不信心の度合を、何ではかったかについては明確でなく、この同心円をえがくとされる三層のアラブムスリムは、筆者のa, b, c型に対応するものでもないが、

35) インタビューは1967年5月に行なわれ、その結果が出版されたのは1969年である。この研究が行なわれた当時、全人口1,600のラク・ラ・ビッシュに、36家族、244人のレバノン・ムスリムが住んでいた。Barclayの研究は、ラク・ラ・ビッシュのムスリムの文化維持の程度を明らかにしようとするものであった。

36) どのような義務であったかについては、Barclayは明確にしていない。彼は、イスラームがコミュニティ志向を持つものであるとの前提に立っているようであり、「コミュニティによって規定されたムスリムの義務」とは、イスラームで定められている六信五行をさすものと考えられる。六信五行は、特定のコミュニティの規定するものではなく、もちろんないが、コミュニティによってその義務の強制規定が持たれると考えているようである。

同化型についての記述は、多少、筆者の a 型に共通するものがある。ただし、同化型が経済的な成功者であるという点については、筆者の調査したところでは、別稿で詳述するように必ずしも相関関係がない。同化型の中にも、失業者や事業失敗者が多い。実業界で成功している者は、b 型や c 型の中にも数多く存在し、彼らはびかびかの西欧風アタッシュケースの中に、小さいコーランを入れて常時携帯し、随時コーランをよみ、礼拝も欠かさず、しかも西欧社会の中で事業において成功をおさめている。

b 型は、カナダ社会への同化もかなりの程度、考慮に入れつつ、自分たちのアラブとしての伝統文化を大事にする者たちである。そしてその伝統文化の中に占めるイスラームの重要性は大きいと考え、イスラーム的行動をとる人たちである。子供たちの学校は、カナダの全日制をえらび、カナダ社会における子供の将来のため、よりよい私立学校への志願希望も強い。しかし同時に、一家で断食月を守り、礼拝も欠かさずする。まわりで飲酒が行なわれていても、彼らだけはアルコールを飲むことを全くしない。カナダの地域社会を象徴するコミュニティ・センターで、バレーボールなどのスポーツ活動³⁷⁾にみなで汗したあとも、「ビールを一杯」というようなことには絶対ならない。ジュースまたは紅茶と甘い菓子で、くつろぎ談笑する。ブリティッシュ・コロンビアの場合は、b 型に属するアラブの多くは、エジプト人であり、他のアラブは a または c に属する者が多い。モンリオールの場合も同様のことがいえ、アラブ文化の紹介を活発に行なっているのは、エジプト人たちである。

c 型はアラブとしてよりもムスリムとしてのアイデンティティを強く持つ者で、たてまえとしては、アラブであることを否定する人たちである。アラブであることを主張しないという点のみをとりあげると、現象的には a 型に類似しているといえるが、動機は全く異なる。

彼らは、イスラームが国境をこえて人類に普遍的なものであり、ムスリムとしては、国籍を云々するべきではないと考える。カナダのスナ派のマスジドには、パキスタン、インド、スリランカ、フィジー、南アフリカ、モロッコ、チュニジア、サウジアラビア、シリア、レバノン、エジプト、ヨルダンなどの国々からムスリムが集まってくるが、アラブ諸国出身だとおぼしき人たちに出身地をきくと、a 型の反応とはちがいが、「サウジアラビアだ」「エジプトだ」「モロッコだ」「レバノンだ」というように答えてはくれる。しかしやがて「そんなことをどうして聞くのですか、どうでもよいこ

37) イスラーム世界では、古くからボロ競技やタカ狩などのスポーツが盛んであったが、西欧近代的なスポーツは、素肌を露出してなされるからといった文化的なちがいのために、一般に普及してはいなかった。しかし最近では、バレーボールや、サッカーなどの競技がはじめられており、西欧的スポーツ活動は、西欧的近代化の1つのメルクマールとなっている。

とですよ。私たちはみな同じムスリムです。」と、こちらをたしなめるように言う。

彼らの多くは、子供たちがカナダの学校に行くことを、好ましくない教育をうけるとして、いさぎよしとしない。イスラーム教徒のみの全日制の学校をマスジドの中、あるいは敷地内に作り、イスラーム的教育をうけさせている。

そこでは男女別学が行なわれ、女生徒はヴェールなどのイスラーム服を着用している。アラビア語は、コーランの言葉すなわち神の言葉として、重要視されるけれども、b型のように母国語としてのアラビア語を強調しない。アラビア語の時間はあるが、授業は英語で行なわれ、仏語のクラスも、もうけられている。

イスラーム至上主義者のcと、アラブ文化の中に占めるイスラームの重要性を認識するbとが、互いにある種の緊張関係は持ちながらも、カナダにおけるアラブムスリム・コミュニティとイスラーム的環境を徐々に作りあげていったといえよう。イスラーム的施設・機関の発展、ムスリムの生存を論じる集会が持たれていることなどを観察すると、これらのアラブムスリムが、地理的には分散して居住していても、ある種のコミュニティとしてカナダ社会の中に根をおろす過程にあることがみとめられる。

2. イスラーム的環境の整備

カナダにおいて初めて公式に組織されたアラブムスリム・コミュニティは、1957年に12人のレバノン・ムスリムたちによって創始されたラク・ラ・ビシュ (Lac La Biche) 地域を中心とする Arabian Muslim Association である [BARCLAY 1969: 64-73]。1959年には、礼拝と集会を行なう建物が、小規模ながら建てられた。1962年には、人々にコーランを教えるイマームが1名任命された³⁸⁾。

その後のアラブムスリムのカナダへの移住により、次々にアラブムスリムのコミュニティが作られていったが、初期のアラブムスリム・コミュニティにおいては、ラク・ラ・ビシュと同様まずムスリム連合会のような連絡組織ができ、次いでマスジド、イスラーム的食品店、ムスリム墓地などの宗教的施設が整備され、それに続いてスポーツ・クラブ、懇親会などの世俗的組織、さらに広報手段としての新聞、雑誌などの出版がなされていった。

しかし、これらが移住直後から、すぐさま整備されはじめていったわけではない。カナダにおけるムスリムは、モントリオールなどの例外を除いて、個々の家族が、都市およびその周辺部に散在しており、集中居住地区が存在しないのが通例である。カ

38) 教育の他に、彼は礼拝の指導、結婚や葬式もとり行ない、人々からイマームと呼ばれたが、「厳格すぎて柔軟性に欠ける」と受けとめられていたという。

ナダにおいても、中国系、マレー系、日系などは、親類縁者をたどって移民して来ている者が多く、およその集中居住区を作っているが、アラブの場合は、個別的に移住して来ており、ごく初期の Free entry 時代に移住して来た者を除いては、カナダに来てから、しかも数年たって偶然の機会に互いに知り合ったという者が多い。とくに1960年代以降、カナダ西部に移住した者は、それぞれが、カナダ的異文化の中でばらばらに孤立して過してきたという時期が長い。さきに述べた移民政策による資格審査を通して来た者であること、元来、個別主義的傾向も強いアラブであること、都市部へ集中したため、隣接して居住したいと願った者たちもまとまった居住地を得難かったことなどがその理由として考えられる。

そのため、結果的には第1段階に整備されたといえるマスジド、その他のイスラーム的施設の建設が着手されるまでには、長短の差はあるけれども、かなりの年月が経過していたことがみとめられる。その間、アラブ諸国からのムスリム移民たちは、個別にカナダという新しい環境の中で生活の舞台を築く努力をしていた。その過程で、西欧的異文化にすっかり同化する者、同化できずに祖国に U ターンしていった者、アイデンティティ・クライシスにおちいる者など、さまざまであったというが、アラブというアイデンティティを保持した者、ムスリムとしてのアイデンティティを持ち続けた者、アイデンティティ・クライシスから抜けでてムスリムとしての、あるいはアラブとしての自己をとりもどした者、あるいは、異文化である西欧社会の中に入りこんで、はじめてイスラームという自分の文化を意識しはじめたという者³⁹⁾など、すなわち先に類型化した b 型あるいは c 型に属する者たちが、徐々に他のムスリムたちと連絡をとりはじめ、地理的には分散したまま、1つのムスリム・コミュニティを形成しはじめ、その段階で、マスジドなどの宗教施設がムスリムたちの間で考えはじめられたのであった。カナダにおけるイスラーム的施設の発展を助長するため、リビア、サウジアラビアなどのムスリム国家が、マスジド建設資金の援助をしていると報道されているが [VANCOUVER PROVINCE NEWSPAPER July 7, 1979], カナダ・ムスリムたちは我々のイニシアティブがまずあってのことであり、また援助はサウジやリビアの政府当局からではなく、民間の「ムスリム兄弟姉妹」たちからのものであると強調する。筆者の調査によると、サウジアラビアやリビアなどの外からのイスラーム・パワーが主導権をにぎっているのではないことは、事実だとみとめられた。ブリティッシュ・コロンビア州リッチモンドに建設されたマスジドは、その一例である。マス

39) たとえば、クウェートにおける厳しい禁酒令の法の眼をくぐって、ひそかに飲酒していたり、エジプトでは、おおいに酒をあおっていたという者などが、飲酒の自由なカナダに来て、しばらくたってから自ら禁酒をはじめたという例なども少くない。

ジド建設のための資金作りは初期においてカナダ、とくにブリティッシュ・コロンビア在住のムスリムの間でイニシアティブがとられ、カナダ・ムスリムたちが自らまず寄付をかって出た⁴⁰⁾。リッチモンドの masjid 建設の母体になったブリティッシュ・コロンビア州のムスリムたちの連絡組織は、やがて **British Columbia Muslim Association (BCMA)**⁴¹⁾ として、大きな組織に成長したが、この BCMA から、代表者の1人がサウジアラビアに派遣され、彼が民間サウジアラビア人に呼びかけて寄付を募ったという。この方式は、現在も続いており、1985年12月には、クウェートに長く住み、その後カナダへ移住したエジプト人がクウェートに出向くことを申し出て、masjid 付属のイスラーム学校建設のための資金集めをした事実もある。BCMA のようなムスリムたちの連合体は、自然発生的なものから、かなり意図的な努力による大組織まで、カナダ全土に分散して存在し、その数をつかむことは難しいが、最大の組織は、**Council of Muslim Communities of Canada (CMCC)**、カナダ・ムスリム・コミュニティ会議)であり、これは、さらに、北米全域にわたるムスリム組織である、**Islamic Society of North America** (北アメリカ・イスラーム協会)の傘下に入っている。

これらのムスリム組織は、カナダのムスリム・コミュニティに関する問題を討議するための場を提供している。ここでの話題は、カナダ的環境の中でのイスラームの問題や、ムスリムが直面する問題に集中する。1981年5月16・17日両日に開催された CMCC の第8回総会では、「ムスリム女性、フェミニズムと家庭」、「ムスリム年長者とカナダの社会構造」、「親たちの対応」などのテーマでセミナーが開かれた [Islam Canada vol. 9, No. 1 1981: 8-9]。

他方、ブリティッシュ・コロンビアのエジプト人組織、**Nile Flaser Egyptian Canadian Society** (ナイル・フレイザー・エジプト系カナダ人協会) のようなアラブ人の文化連合組織は、カナダ全土に13組織を数える。これらの組織は文化主張型(アラブ主義型)と筆者の呼ぶ b 型グループに属する者が力を入れているものであるが、

40) BCMA 事務局の役員および、建設運動にたずさわったムスリムたちからの情報、および、Aziz Khaki とのインタビューによる。

41) BCMA は、1966年に設立され、現在約1万人の会員を容する。その内訳は、フィジー人ムスリムが42%、パキスタン人ムスリム39%、インド人ムスリム14%、リビア、レバノン、エジプト、南アフリカのムスリムが残りの5%を占める(うち、エジプト人は0.5%)。また、サウジアラビアから医学を勉強にきた学生なども含まれている。個人会費制で年会費は10ドル。

BCMA は、特に青少年や女性のための活動に力を入れている。年に3回、コーラン暗唱コンテストが行われるほか、月に1度はゲームを楽しむパーティー形式の集まりが行われる。女性のための講座や、西欧風のいわゆるベビー・シャワー(赤ん坊への贈り物を持ちよるパーティ)も開かれることが多い。また、非イスラーム教徒との交流にも積極的であり、特にユダヤ人やキリスト教徒といった、「啓典の民」(Ahl al-Kitab) との交流を重視している。

排他的なアラブ人のみの組織ではない。アラブ人の作る多くの集団がそうであるように、一種の開放系を持っている。アラブに興味を持つ者、イスラームに関心を抱く者、あるいは、全くそれらに関心はなくとも、単なる友だちとして、非ムスリムのフランス系カナダ人、イギリス系カナダ人、ユーゴスラビアからのムスリム、南アフリカのムスリム、日本人（筆者を含む）などもその正式メンバーとして受け入れている。数は多くないが、クリスチャンアラブもメンバーの中に包含している。

定期的なピクニック、スポーツ活動、懇親パーティ、子供会、などを行なうのが主な活動であるが、パーティなどの席上、いわゆる白人カナダ人や、クリスチャンアラブが、飲酒をしているのを許す雰囲気もある。上記の活動以外に、アラビア語学校に力を入れているが、アラビア人以外の、たとえばユーゴスラビア人、トルコ人、南アフリカ人ムスリムやクリスチャンアラブの子供たちも、アラビア語を習いに来ている。時折、コーランのアラビア語のみを教えるようにという親たちの要望が出されるが、キリスト教徒のアラブもアラビア語を習いたがっているのだからと、イスラーム本位よりもアラブ文化主義の方が、現在のところ、主張を通してアラビア語学校が開かれている。しかしb型の中でもとくに宗教教育に熱心なアラブの間では、3、4家族がもちまわりで、個人的にコーランのアラビア語クラスを持っている例もみられる。

アラブ人の連合会は、連絡誌を毎月、あるいは年4回発行しているのが通例で、非アラブ人も含めて会員の動向を伝えあったり、アラビア語起源の英語や仏語についての連載記事をのせたりしている。

これらアラブ人組織は、全国組織である Canadian Arab Federation (CAF カナダ・アラブ連盟) に統合されているが、これによって統制されているというわけではない。CAFはその本部がオタワにあり、アラブ諸国の大使館との連絡や、アラビア語の新聞などを送付するといったことをしているのみである。

これらのムスリム連合会やアラブ連合会は、当初よりその成員メンバーに社会的、宗教的な情報を提供するための通信に力を入れているが、最近では、カナダ・ムスリムのためのイスラーム的環境作りのため、政治活動をする傾向も表れて来ている。とくにムスリム連合会の方にその傾向が強く、1979年7月には、CMCC から分派して、新しいグループが誕生した。この新グループは、Moslem Political Action Committee (ムスリム政治行動委員会) とよばれ、最初の声明文の中で、Federal Liberal Party (連邦自由党) に投票するようにムスリムに呼びかけている [VANCOUVER PROVINCE NEWSPAPER July 7, 1979]。また、カナダの Islamic Society of North America の地域事務局は、州及び連邦局に対し毎週金曜日には、礼拝のため、1時間半の労働

時間短縮ができるような法律を制定してほしいと、オンタリオのムスリム 2,000人以上の署名を集めた嘆願書を提出した [TORONTO GLOBE AND MAIL NEWSPAPER June 25, 1983]。これらの活動は、その具体的成果を見るにはいたっていないが、全世界的なイスラーム復興運動の波に呼応するように近年、活発な動きをみせている。

このような傾向はカナダで発行されているムスリム向けの出版物の内容を検討しても明らかである。出版物は、小規模のものまであげると、枚挙にいとまないが、主要なものの中から、とくにアラブおよびムスリム向けの定期刊行物をひろいあげると、次のようなものがみられる。オンタリオでは、*Canadian Middle East Journal*, *Arab World Review*, *Al Fazr al-Arab*。トロントでは、*Da'a Maarak*、オタワでは *An-Nahda*, *Sarkhat Al Haq*, エドモントンでは *Al-Maurid*, バンクーバーでは *NFECS*⁴²⁾ などである。アラブムスリムを含め、カナダ全土のムスリム向けの最も大きい定期刊行物には、CMCCの機関誌である *Islam Canada* がある。

また、北米大陸全体のムスリムにむけては、*Islamic Horizon*, *The Middle East*, *The Minalet*, *Impact* などの雑誌があり、中東情勢や、北米大陸の時事問題、各地のムスリムコミュニティの動向などを掲載している。中でも *Islamic Horizon* は、カナダのエジプト人ムスリムの間でとくによく読まれている。筆者のインフォーマントの多くはこの月刊雑誌を定期購読している。Community Center でのパーティーでも、椅子の上に読みさしが置かれているのを、しばしば見かけたり、同誌の「イスラーム教徒の結婚相手求人欄」を読みながら、結婚ばなしに花が咲いているのに出くわしたこともあった。若者むけには、Muslim Student Association of the United States and

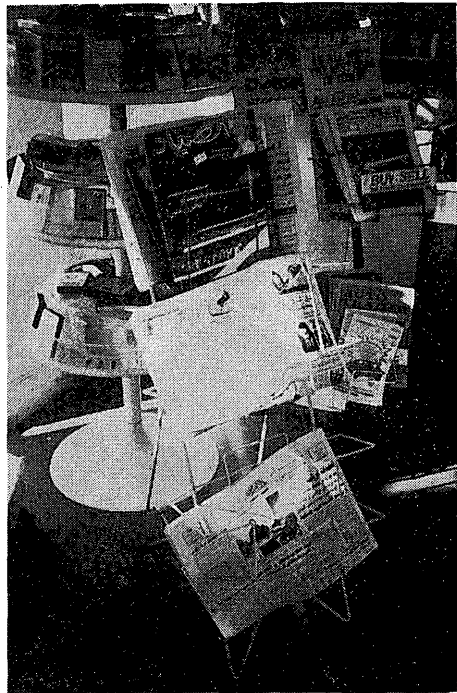


写真9 イスラミック食料品店には、アラビア語の新聞やムスリム関係の雑誌も並んでいる

42) Nile Fraser Egyptian Canadian Society の略称。エジプトを流れる Nile 河と、バンクーバーを流れる Fraser 河にちなんだ名称である。

Canada の機関誌である *MSA News* (Muslim Student Association News) などがある。

出版活動の他に、モントリオールの放送局の1つでは、週に1度、アラブとくにモントリオールに多いエジプト系カナダ人のためのラジオ番組が提供されている。中東ムスリム世界で有名な説教師によるイスラームについての講話は、人気のある番組の1つになっている。これらのマスコミ活動は、先に述べた b 型に属するアラブによってはじめられたものが多い。とくにアラブ諸国の中では、カナダへの移民が最も多い国のひとつであるエジプトから1960年代以降に移民した者たちが、イニシアティブをとっている。先に述べたように、1960年代以降のエジプト人移民は高学歴であり、カナダへの移住前から英語や仏語を話すことの出来る者が多く、カナダ社会に容易にとけこむことの出来る条件をそなえていた。またこれらエジプト移民はイスラームを含むアラブの民族的遺産を誇りにする者が多い。したがってモントリオールでは、Circle Saint-Marc や Circle Heliopolis などのクラブを作り、カナダ人社会にむけてアラブの芸術や文学や音楽を積極的に紹介して来た。映画を通して、アラブ文化を広報したり、カナダにおけるエジプト研究者グループのためのツアーを企画するというようなことにも熱心である [DEPT. OF SECRETARY OF STATE 1979: 70]。

アラブムスリム・コミュニティは、以上の他に、ハラール食肉店⁴³⁾、イスラーム関係専門書店、イスラーム教徒用墓地、アラブイスラーム文化センターなどを、次々に作り、異文化環境の中に、アラブ・イスラーム的環境を、少しずつ整備していく過程にある。これらの一つ一つについての詳細は、稿をあらためて報告する。

3. 新世代の問題

このようなアラブ・イスラーム的環境が、将来においても、整備され続け、活力を持ち続けるかどうかは、アラブムスリムの新しい世代の動向と関連してくる。

先に述べたように、カナダ政府による初期の移民制限のため、アラブムスリム移民のカナダへの流入の歴史は、かなり最近になってから形成されはじめたものである。したがってカナダ生れの世代がようやく成年に達しはじめたばかりであり、彼らについての情報は少ない。しかし、次のような三点からその概観を考察してみた。

- 1) 新世代のアイデンティティの問題
- 2) カナダ的環境の中での葛藤

43) コーランの文句をとえながら頸動脈を断ち切ることによって、イスラーム的処理がなされた食肉を売る店。

3) 言語問題

筆者の調査時（1985年～1986）年、9才から30才であった若者たち81人に、聴き取り調査あるいは、観察調査を行なった。そのうち、カナダ生れは62人、あとの19人は、留学生としてカナダの大学に来て、そのまま居残ったという青年たちと、アラブ圏で高等教育を受け職を求めて、カナダにやって来た者である。9才以上を対象にしたのは、アラブ・イスラーム社会の一般の人々の間においては、9才になると、男女とも、断食などの礼拝の義務を負うとされ、親たちも、ムスリムとしてのつとめを奨励し、本人たちもムスリムとしての自覚を持ち始めるからである。この調査から得られた結果は、カナダ生まれとアラブ生まれの差や男女の差は、ほとんど問題にならず、年齢別グループがくっきりとえがかれるということであった。9才～14才までの第一グループ（36人）、15才から24才までの第二グループ（16人）、25才以上の第三グループ（29人）である。第一グループは、親のアイデンティティを、そのまま受けついでいるものがほとんどである。すなわち、a型第一グループの子どもたちはカナダ人としての自分を意識して生活しており、カナダ人の如くふるまうことを望み、かつそうしている。このグループに属する新しい世代は、アラブ民族、アラブ文化、あるいは、ムスリムのグループに自分を同一視する程度がきわめて低い。

b型第一グループの子どもたちは、日曜日毎にアラビア語学校に送られているものが多い。アラビア語の勉強自体は、「つまらない」といい、不熱心であるが、アラビア語を勉強すべきだとは思っており、自分がアラブであるとの自覚は強い。c型第一グループの子どもたちは、全日制のイスラーム学校に通っているものがほとんどであ

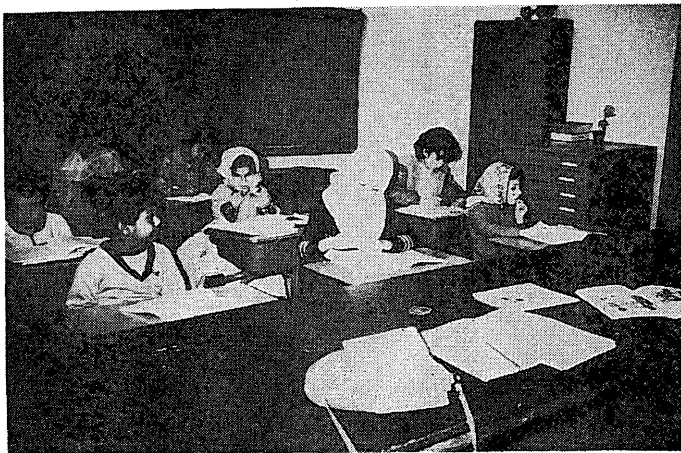


写真10 全日制イスラーム学校に通うムスリムの子どもたち

る。女子は、ヴェールを被り、足首までの長いスカートをはいて通学しており、他のカナダ人とは、全く異なる服装であるが、それをいやがる様子もない。筆者が面接したうち5人の女生徒は、2年ほど前まで普通全日制のカナダの学校に通っていたが、親にたのんで、イスラーム学校に転校させてもらったという。彼らの親は、カナダの学校においても、イスラーム的であることができるし、むしろイスラームの影響力を、腐敗しかかっている西欧社会におよぼすほどでなくてはならないと考える積極的なイスラーム普遍主義者であった。しかし子どもたちは、カナダの環境の中で、自分たちだけが、イスラーム的であることは、できないと思った。しかし、この時、この5人の子どもたちは、いずれもイスラームをすててカナダ化したいという発想は全く持たなかったという。現在イスラーム学校に通っていて、とても幸せだと述べた。

第二グループである15才から23才までの子どもたちは、カナダ生まれもアラブ生まれも親たちのb, c型とは関係なく、その73%までがアラブムスリムであるとの自覚は持つが、葛藤の時代にあると観察された。いわゆる“peer pressure”に悩んでいると筆者にうったえるものが圧倒的に多かった。まわりが酒を飲んでいる時には、自分も飲んでしまう。酒に酔っていっしょにさわいだり、あばれたりした後で、自己嫌悪におちいるという。一方、a型グループの親を持つ子どもたちは、カナダ人と同じようにふるまうことに疑問は持たず、カナダ人と全く同様に行動しているのだが、時折、異和感を持ったり、白人カナダ人から差別をされているのを感じることがあると答えた者がいた。

Lila Fahlman は、教鞭をとっていたエドモントンの中学校と高校で調査を実施し、カナダのムスリムの若者に関する研究を行なっている。ムスリムの社会的・文化的価値観と、カナダ社会における価値観との間で葛藤をくりかえすムスリム学生の姿が報告されている。たとえば、麻薬を吸ったり、酒を飲んだりする仲間からうとんぜられること、女生徒が、短いスカートをはいたり、男の子と席を並べて勉強することに抵抗があること、アラブから来た友だちとアラビア語で話す先生から叱られることなどがあげられている。被調査者であるムスリムの生徒たちは、彼らの両親から受けた家庭での教育に強く影響されており、イスラームを彼らの価値体系の根源と考えている。それ故に、価値観の異なる西欧社会の中であって心理的葛藤を持ち、カナダ社会に批判的になる傾向があると指摘している [LILA 1983: 205]。

筆者の調査した81人のうちの27%の若者たちは、自分の親はアラブムスリムだし、自分も生まれたときからイスラーム教徒だということになっているけれども、自分自身はアラブの地を見たこともなく、イスラームにも関心がない。自分の国はカナダし

か考えられないという者たちであった。親との間にコンフリクトがあり、とくに、異性とのつき合いに関して親と意見の衝突をみることが多い。彼らは「『娘はつき添いなしで家の外でデートしてはいけない』と考える親たちは、時代おくれである」と、強い抵抗を示す。その結果、逆に異性との交際において極端に走ってしまうものもある。親たちが、前節で述べた出版物の結婚相手求人欄に「敬虔なムスリム男性を求む」とか「当方、カナダ生まれのムスリム男性、誠実なムスリム女性を求む」などという広告⁴⁴⁾を出したり読んだりするのは、馬鹿げたことだと一笑する。

しかし、「ムスリムの子女は両親の正式な許可がなければ決して結婚しない」という伝統的慣習に対してはどう思うかという質問に対しては、必ずしも否定的ではない。当事者間の同意のみでもよいけれども、親もみとめた方がよいと思うと、柔軟な態度をみせるものが多い。しかし、いずれにしろ、第二の年令グループにいる青年男女は、最もゆれ動き悩んでいる世代にある。

25才をすぎた若者たちは、幼児の頃アラブイスラーム圏で育ったもの78%、そうでないもの22%であったが、一様にイスラームへの傾斜を示した。この世代の多くは9才前後の時両親とともにカナダに移って来て以来、カナダの小、中、高等学校および大学で教育を受け、学生時代は、友だちと酒も麻薬もやった。しかし麻薬や酒に酔いつぶれている友だちの姿に異和感を持ち、そういう友だちとはつき合わなくなったという者がほとんどを占めていた。西欧的価値観を一度は受け入れたものの、自分はアラブムスリムであるという意識を持つにいたり、ムスリムの会合や、マスジドでの会合に顔を出しているうちに、それまでのもやもやしたアイデンティティ・クライシスのようなものから脱出し、安定感を得ることが出来たと答え、イスラーム的価値と西欧的それの間の葛藤は意外なほどみられなかった。

ムスリムの青年たちは、1980年の CMCC 第7回年次会議で、彼らに関心を持っている諸問題を話し合える場を提供された。その時討議されたのは、パーティーで、カナダ人の友人たちがアルコールや麻薬に酔っている時に、彼らムスリムが禁酒をして

44) たとえば、北米イスラーム協会 (Islamic Society of North America) の月刊誌「Islamic Horizons」の matrimonials という頁には、ムスリムの男性がムスリムの女性を求める欄、ムスリム女性がムスリム男性を求人する欄の二つに分かれ、たとえば、次のような広告になっている。

“Arab Sunni Muslim seeks matrimonial correspondence with Muslimah age 30-40. photo 4 details with first letter please.”

“Egyptian Muslim seeks marriage with American Muslimah. Details and photo with first letter”

“Brother (ムスリム男性のことをさす) seeks inquires for his Egyptian sister (ムスリム女性) age 26, student for Business Adm., from devout, practicing Muslim brother, [ISLAMIC HORIZONS VOL. XIV, No. 1, Rabi'al Thani 1405 (イスラーム暦1405年ラビウ・アッサーニー月) January 1985]

いたがゆえに気まづくなったり、ハラール食肉のみに制限することが困難になったりという問題であった。この合会では、みなが問題を出し合うことで終わったようであるが⁴⁵⁾、その会議に出席した若者たちにきくと、同じことを悩んでいる者の多いことがわかり、互いに心を打ち明けたのは、何よりの成果だったという。この会議の席上では互いのコミュニケーションは、英語と仏語でおこなわれ、アラビア語はいっさい使われなかった。

筆者の調査において、移民第一世代との面接は、アラビア語でなされたが、9才から30才までの若者とは、ほとんど英語で行なうことになった。アラビア語ができるものでも、英語で話す方が楽であるという。

民族と言語の関係は密接で祖先からの言語が文化継承の上で重要な意味を持つことは、一般によくいわれて来たことである。しかし、アラビア語とアラブ民族の関係は、単純な相関関係にあるのではなさそうである。アラブムスリム、とくに若者とアラビア語の関係はどのようなものであろうか。初期の移民（今世紀初めに来た移民）は、自分たちの言語アラビア語を保持した。彼らの多くは、カナダへ来る以前に英語も仏語も学んだことがなく、新しい国においても、商売上、仲間うちで頻繁にアラビア語を使っていた。

しかし、初期移民の子孫の間では、アラビア語が存続しているとはいい難い。親の方は熱心で5、6家族がグループになり、家庭で、もちまわりのアラビア語クラスがもたれ、父母の誰かが、順番にアラビア語を教えるというような自主授業も多くみられ、アラビア語を存続させるために設立されたアラビア語学校も資金不足に悩んでいるものの、各所に点在している。しかし、生徒たちが日常の生活で使わない言語になかなか熱心にならず、世界でも難しい言語の一つとされるアラビア語の習得を放棄していくケースが多い。

第二次世界大戦後、カナダにきた多数の新しい移民により、アラビア語を話すコミュニティに、かなりの活力がもたらされたという事実もあり、現在アラブ系カナダ人のほぼ3分の2は家庭生活でアラビア語を使っている。しかし、新しい移民によって、アラビア語がもちこまれているという状況があるにもかかわらず、全体としては、とくに若者たちの間でアラビア語が失われつつあることは否定できない。前述したように、新しい移民の多くは高学歴であり、カナダに来る以前に、英語または仏語を多少

45) 1980年5月19日付 The Globe and Mail 紙の Kashmeri Zuhair の記事による。ここでは、結論は何も出なかったと報道されているが、こういう問題で CMCC の合会が持たれたのは、初めてのことでこの合会に出席したムスリム青年男女たちに聴いてみると個人的に得ることが多かったという。

なりとも知っており、いずれ本国へ戻るという予定をもつものは少ない。これらの理由から、初期の移民に比べ、親から子どもへアラビア語を伝えるということに成功している率は低く、成功させようという熱意も b 型グループの親たち以外のグループではそれほど強くない。

アラビア語の能力が低下していることは、どういうことを意味するか。アラビア語の喪失をもって、カナダ生まれの世代は、移民第一世代よりも、アラブとしての文化的アイデンティティが低下していると指摘するアラブ出身のカナダ人社会学者もいるが [ABU-LABAN 1980: 215-218]、単純にそっくり切ることにはできないというのが今回の調査研究をしての筆者の一つの結論である。アラブとしてのアイデンティティを、アラビア語能力というメルクマールだけでは判断できない。

たしかにアラビア語は、アラブ的伝統社会との文化的つながりを保つ上で、重要な役割を果たすものではある。しかし、別稿で詳述するように、筆者が集中調査を行なったエジプト人社会においても、アラビア語が失われることは、アラビア文化、アラブ民族のアイデンティティを失うことにはなっていない。アラビア語は、コーランの言葉として、神の言葉として、また、音楽的美しさを持つ言葉として、アラビア語を話せない若い世代の間においても、重要な価値を持つ言語として考えられている。表現手段としての「実用言語」は英語であってもかまわないとするのである。アラビア語は「価値言語」として彼らの文化遺産の中に場を占めているといえよう。文化遺産のその他の側面、たとえば、音楽、踊り、詩、宗教上の慣習、社会構造、価値観などは、「実用言語」とは独立に存続しうると考えられるのである。アラブムスリムたちが英語で話しながら、その内容に、中東アラブ諸国で筆者にはなじみになったアラブの価値観が色濃く出ているのを見ても、また英語でのみ日常生活を行なっている若者たちの間に、アラブ的行動様式が観察されることから明らかである。

しかし、アラビア語の喪失とイスラームへの傾斜との間には、ある種の相関関係が出てくることが考えられる。アラビア語もアラブ伝統文化も否定して来た a 型グループの者がさきにふれたように、ある日突然の如く、c 型グループに入り、熱心なムスリムとして行動しはじめるケースや、b 型が、c 型に対して、緊張関係をもちながらも、イスラームという点で、c 型グループに一步ゆずっており、b 型グループから c 型グループへの移行も、とくにアラビア語の話せない世代の中にみられるという事実から考察すると、アラビア語の能力の低下は、アラブとしてのアイデンティティからムスリムとしてのアイデンティティへ移行させる契機をはらんでいるといえる。

さきにのべた若者第 1 グループや第 2 グループが、年令を経るとともに、第 3 グル

ープのように成長していくとは、もちろん簡単に推論はできない。しかし、アラビア語のできないアラブムスリムが、アラブとしてのアイデンティティよりも、自らのアイデンティティをムスリムであるということに求める可能性は、充分考えられる。両親の使用する母語を失い、流暢な英語や仏語をあやつりながら、イスラーム協会やマスジドで役員をつとめている新世代の例を、すでに見かけるのである。

総括と結語

本論文は、カナダにおけるムスリム、とくにアラブムスリムの事例研究に先立ち、その背景を明らかにするための序論として書かれたものである。世界で二番目に広い面積をもつ広大な国、カナダにおけるアラブムスリムを概観することは、資料が十分に存在しないということもあり、至難であった。しかし、アラブムスリムを、カナダの移民史の中に位置づけ、さらに、今後の展望を総括的に論じることは、ある程度できたと思っている。

カナダは、1867年以来積極的な移民政策を行ない、現在では多くの民族集団を含む多文化主義の国家となっている。しかし、第1章で述べたように、カナダの移民政策は長らく「望ましくない」「同化不可能な」移民を排斥して行なわれ、排斥された移民の中には、ムスリムおよびアラブも含まれていた。1960年代に移民法の改正が行なわれ、学歴、経験、職業技能を重視する「得点制度」が採用された。また保証人のある移民も、親族の再統合の観点から優先されてきた。しかし最近では、カナダの経済的不振にともない、移民の数は減少している。カナダのムスリム移民は、このような移民政策や経済状況に、常に大きな影響を受けてきた。移民法の緩和により、ムスリム移民の人口は急激に増加し、1985年には約12万から14万人に達すると言われている。

これらムスリム移民の出身地は、本稿で詳述したように、さまざまである。移民法が改正された1960年代以降、インド、アフリカ、フィジーなどからのインド系ムスリム移民が増加し、筆者が集中的に事例研究をしたブリティッシュ・コロンビアでもフィジーからのムスリム・コミュニティが最多数人口をもち、アフリカからのイスラーム派ムスリムが地盤を作りつつあった。レバノン、エジプト、シリアなどからのアラブ移民も、60年代以降は専門職をもつ者、ホワイト・カラー層が増えている。

しかし移民法が改正され、ムスリムやアラブの移民数が増加しても、彼らを迎え入れるカナダ社会の側に偏見や差別がなくなったわけではない。「石油成金」「狂信的」といったイメージは、一般市民だけでなくインテリ層の間にも存在し、カナダで発行

されている教科書にももちこまれている。ブリティッシュ・コロンビア州バーナビーにおける、イスマーイーリー・センター建設に対する周辺住民の反対や、オンタリオ州バリーのシーア派ムスリムに対する体育館使用不許可の例も、ムスリムに対する差別や偏見から起ったものであった。

このような環境に対し、ムスリム、とくにアラブムスリムはどのように対応したかという点について、筆者はアラブムスリム個人の、あるいは集団としてのアイデンティティの問題、コミュニティ形成、カナダ生まれの新世代の動向から考察してみた。その結果、アラブムスリムは、a. 同化型、b. 文化主張型、c. トランスナショナル型の3種類に分けられることが判明した。カナダ社会に同化することを第一目的とし、アラブであること、ムスリムであることを否定する a 型、アラブの文化的伝統を大事にし、その文化継承の重要な一つとしてイスラーム的行動をとる b 型、アラブ民族ということにもアラブの国籍をもつことにも重要性をおかず、国籍などをこえムスリムとしてのアイデンティティを重視する c 型である。このうち、多数派を占める b 型と c 型に属するものが、カナダにおけるアラブムスリム・コミュニティを形成してきたといえる。しかし、少数派である a 型も、ある日突然の如く、c 型に移行するという現象がみられ、そのダイナミズムを含めて abc 各々が、カナダにおけるムスリムコミュニティ形成に関与しているといえる。それぞれやり方は異なるが、これらのアラブムスリムによってカナダにおける多くのマスジド建設、BCMA や CMCC のようなムスリム組織の形成がなされ、アラブやムスリム向け定期刊行物の出版も盛んである。

カナダ社会における差別と偏見、イスラーム的環境の整備という状況の中で、カナダ生まれの新世代は、彼らを取りまく非イスラーム的・カナダ的環境とイスラーム的家庭環境との二重環境の中でゆれ動きながら、自己のアイデンティティ確立のための葛藤に悩む者も多い。筆者は、新世代のムスリムを、年令集団別に調査研究したが、その結果明らかになったことは、15～24才では、非ムスリムの同世代との peer pressure に悩むが、徐々に、アラブムスリムであるとの自覚とアイデンティティを形成していく者が多いということである。いずれの年令集団でも実用言語としてのアラビア語の能力は低下する傾向にある。しかし、日常生活は英語で行なっているにもかかわらず、彼らの母語として、あるいは神の言葉としてアラビア語を第一言語として考える者が多い。すなわち「価値言語」としてのアラビア語は保持されているということである。コミュニケーション手段として使う言語は、アラビア語でなくなってしまう、英仏語で日常生活を行なうようになっていっても、アラブムスリムは、アラブムスリムとしてカナダ社会に

強固に生存しつづけていくと考えてよからう。

トルドー首相以来のカナダにおける多元文化主義は、多様な民族集団の存在する現在のカナダにおいて、カナダ人としてのアイデンティティよりも、民族集団としてのアイデンティティを持つことを奨励する結果となっている。それは、それぞれの出身国との結びつきを強化し、本国の問題をカナダに持ちこむ結果にもなっている⁴⁶⁾。アラブ世界で活性化しているイスラーム復興運動と、カナダのアラブムスリムが結びつく契機を増大しているともいえる。

そういうカナダの環境の中で、アラブムスリムの新世代が、機能言語としてのアラビア語を失い、価値言語としてのアラビア語を保持するということは、イスラームが啓示された神の言語としてのアラビア語を大事にするということの方が、アラブ民族の母語としてのアラビア語を重要視するよりもはるかに大きくなっていくと考えられる。とすれば、アラブ民族集団の一員としてより、ムスリム集団の一員として、自己同定していく可能性の方が、二世、三世の時代には大になるかもしれない。そういうことになれば、カナダにおけるイスラームの環境の整備は、ますます強化されていくであろうし、カナダにおいても、他の欧米諸国と同様にイスラームが第二宗教化する方向に進んでいくであろう。

以上のように、移民政策の持つ国家エゴ、あるいは、ある特定民族集団の利益と結びついたエゴが明らかにされ、偏見や無知がひきおこす少数民族集団への圧迫を、ムスリム、とくにアラブムスリムの問題を通して考察することができた。同時にそういう否定的異文化環境の中であって、さらに根をはっていかうとする民族集団のもつ強靱さも浮きぼりにされた。

ここで今後の課題として問題になるのは、民族集団を民族集団たらしめているものは何かということである。それは従来、一般に民族の分類基準とされていた言語ではなく、その民族集団に属する成員の生き方を決めていく価値観ではないか、という仮説を提供しておきたい。アラブムスリムの場合には、イスラームというものが、その価値体系の大きな部分を占めるものであることは、本稿でみたところである。

いずれにしても、民族とは何かが、カナダにおいてのみでなく世界中で、もう一度問いなおされねばならない時期に来ていると考えられる。

46) シーク教徒のカナダにおける暴動などはその例である。

謝 辞

本稿は、国立民族学博物館研究部合同研究会で発表したものの一部である。そのさいに、有益なコメントをくださった中牧弘允助教授、大塚和夫助手をはじめ、出席者の皆様にお礼を申し上げます。

本稿の草稿の段階においては、福井勝義助教授、須藤健一助教授および中山和芳助手が、ていねいに読んでくださり、貴重な御教示をくださった。

また本稿の作成に、惜しみなく手をかしてくださった河田尚子さんおよび久保正敏助手にも心からのお礼を申し上げます。

文 献

- ABRAHAM, Sameer Y. and Nabeel ABRAHAM (eds.)
1981 *The Arab World and Arab-Americans; Understanding a Neglected Minority*. Center for Urban Studies, Wayne State University.
1983 *Arabs in the New World, Studies on Arab-American Communities*. Center for Urban Studies, Wayne State University.
- ABU-LABAN, Baha
1979 Arab Immigration to Canada. In J. L. Elliott (ed.), *Two Nations, Many Cultures*, Prentice-Hall, pp. 372-383.
1980 *An Olive Branch on the Family Tree; The Arabs in Canada*. McClelland & Stewart and Canadian Government.
1983 The Canadian Muslim Community: The Need for a New Survival Strategy. In E. H. Waugh, B. Abu-Laban & R. B. Qureshi (eds.), *The Muslim Community in North America*, The Univ. of Alberta Press, pp. 75-92.
- ABU-LABAN, Baha & Sharon MCLRVIN
1975 Stereotypes of Middle East Peoples; An Analysis of Church School Curricula. In Baha Abu-Laban & F. Zeadey (eds.), *Arabs in America, Myths and Realities*, The Medina Univ. Press International, pp. 149-169.
- ANDERSON, Alan B. & James S. FRIDERES
1981 *Ethnicity in Canada*. Butterworths.
- ANDERSON, Charles P., Turtgabjar BOSE & Joseph I. RICHARDSON (eds.)
1983 *Circle of voices*. Oolicham books.
- ASWAD, Barbara C. (ed.)
1974 *Arabic Speaking Communities in American Cities*. Center for Migration Studies of New York, Inc., Assoc. of Arab-American Univ. Graduates, Inc.
- BARCLAY, Harold B.
1968 An Arab Community in the Canadian North-West; A Preliminary Discussion of the Lebanese Community in Lac La Biche Alberta. *Anthropologica* 10(2): 143-156.
1969 The Perpetuation of Muslim Tradition in the Canadian North. *The Muslim World* 59: 64-73.
1976 The Lebanese Muslim Family; Ishwaran. In Holt (ed.), *The Canadian Family*, Rinehart and Winston, pp. 92-104.
- DEPT. OF MANPOWER AND IMMIGRATION
1972 *The Immigrant Program*. Ottawa.
1976 *Immigration Statistics 1956-1974*. Ottawa.

- DEPT. OF SECRETARY OF STATE (Multiculturalism Directorate)
 1979 *The Canadian Family Tree; Canada's peoples*. Ontario: Corpus.
- DRIEDGER, LEO (ed.)
 1978 *The Canadian Ethnic Mosaic*. McClelland and Stewart.
- ELLIOTT, Jean Leonard (ed.)
 1979 *Two Nations, Many Cultures*. Prentice-Hall of Canada.
- FATHI, Asghar
 1973 Mass Media and a Moslem Immigrant Community in Canada. *Anthropologica* 15(2): 201-230.
- FEDERAL STATISTIC CANADA PUBLICATION
 1931 *Census of Canada*.
 1941 *Census of Canada*.
 1951 *Census of Canada*.
 1961 *Census of Canada*.
 1971 *Census of Canada*.
- GREEN, Alan G.
 1976 *Immigration and the Postwar Canadian Economy; Canadian Immigration Program and Immigration Policy Perspectives*. MacMillan of Canada.
- HAGOPIAN, Elaine & ANN PADEN (eds.)
 1969 *The Arab Americans; Studies in Assimilation*. The Medina Univ. Press International.
- KALBACH, Warren E.
 1978 Growth Distribution of Canada's Ethnic Populations 1871-1971. In Leo Driedger (ed.), *The Canadian Ethnic Mosaic*, McClelland and Stewart, pp. 285-297.
- 片倉もとこ
 1981 「イスラームにおける人間関係—アラブ・ムスリムにおける集団と個をめぐって」『イスラーム文明と日本文明——相互理解をめざして——』国際交流基金, pp. 308-320.
- KATAKURA, Motoko
 1981 The Group and Individual in Arab Muslim Communities. *The Islamic World and Japan*, Japan Foundation, pp. 285-297.
- KENNY, L. M.
 1975 The Middle East in Canadian Social Science Textbooks. *Arabs in America, Myth and Realistics*. The Medina Univ. Press International, pp. 133-147.
- LILA, Fahlman
 1983 Culture Conflict in the Classroom: An Edmonton Survey. *The Muslim Community in North America*, The Univ. of Alberta Press, pp. 202-221.
- MURRAY, Hogben
 1983 Socio-Religious Behavior of Muslims in Canada: An Overview. *The Muslim Community in North America*, The Univ. of Alberta Press, pp. 111-123.
- NOVARIS, John
 1971 *Strangers Entertained*. Evergreen Press.
- 大野盛雄
 1971 『ベルシアの農村』 東京大学出版会
- SAFA, H. I. and DU TOIT B. M. (eds.)
 1975 *Migration and Development: Implications for Ethnic Identity and Political Conflict*. Paris Mouton.
- WAUGH, Earle H., Baha ABU-LABAN & Regula B. QURESHI (eds.)
 1983 *The Muslim Community in North America*. The Univ. of Alberta Press.